

# 研究指導を成功させる方法

— 学位論文の作成をどう支援するか —



リチャード・ジェームス  
ガブリエル・ポールドウィン  
近田 政博 訳

# 研究指導を成功させる方法

— 学位論文の作成をどう支援するか —

リチャード・ジェームス  
ガブリエル・ボールドウィン  
近田 政博 訳



## 日本語版によせて

このたび、『研究指導を成功させる方法 ―学位論文の作成をどう支援するか―』の日本語版が完成し、日本の大学教員の皆さまにご覧頂けることを嬉しく思います。本書はメルボルン大学が全学的な見地から研究指導の水準向上を目指し、指導教員の能力開発を支援するために開発したものです。メルボルン大学はオーストラリアを代表する研究重点大学であり、高水準の大学院教育と研究訓練を行うことは、大学のミッションの中核となっています。本書は PhD や専門職学位、修士学位、オナーズプロジェクトなどの研究指導を行う教員の能力開発ツールとして用いられており、メルボルン大学だけでなく、オーストラリアの多くの他大学でも活用されています。

本文で説明したように、研究指導は大学における教育活動の中でも複雑で集中的な形態です。ここでは学生の発達に対して深い関心を抱き、学生が直面している問題を思いやる能力など、幅広いスキルが求められます。また、研究指導には多大な労力が必要とされます。なぜなら、個々の学生の多様なニーズ、および彼らの研究プロジェクトの中で起こりうる特定の問題にそのつど対応しなければならないからです。こうした多様性を考えれば、研究指導がいつも成功するとは限らないのは当然であり、国際的にもそういうものであると認識されています。オーストラリア内外の多くの大学で研究指導の質を高めるための努力がなされていますが、単にガイドブックを作ることだけで、質の高い研究指導を実現するための問題解決ができるとは思いません。しかし、いくらかの基礎的なサポートにはなるでしょうし、優れた事例がどのようなものかを知るきっかけを提供できるのではないかと考えています。

このガイドブックを制作するための準備段階として、我々は一連の質問を自分たち自身に投げかけました。学生が研究計画を立てるのを教員が支援するとは具体的にどういうことか？ 優れた指導教員は学生がデータ収集・分析する際に、あるいはそれを文章にまとめる際にどんな役割を果たしているか？ 最終的な論文の水準および学生の将来のキャリアについて、指導教員

はどのような責任を担っているのか？ これらの質問にはいずれも、決まった解があるわけではありません。研究指導の実践は、個別の学生のニーズに依存する部分が多いからです。さらにもっと重要なのは、研究指導の内容は学問分野によって著しく異なるということです。

オーストラリアにおいても学位を取り巻く環境は変わりつつあります。政府の高等教育助成の方針は、一定の修学年限においてどれだけの数の学位を授与できたか、あるいはどれだけの割合で学位を授与できたかに基づいています。こうした政策によって、大学は研究指導できる教員の養成と研究指導の質保証という内部メカニズムに力を注がざるを得なくなっています。指導教員に対しては、研究指導の質やその成果の水準について説明する責任がますます大きく求められるようになっていきます。

グローバル化時代において一国の競争力を高める上で、高等教育システムと研究トレーニングの質がきわめて重要であるということは広く認識されています。日豪両国の将来に繁栄がもたらされるかどうかは、知識産業の双肩にかかっています。知識産業には研究スキル、批判的思考スキル、問題解決スキル、そして想像力や創造力など、さまざまな高水準のスキルが必要とされます。これらのスキルはまさしく、研究学位を取得するプロセスの中で習得されるものです。学位を与えるということは、一義的には研究スキルや研究方法に関してきちんとしたトレーニングを提供するということです。ただし、博士課程レベルの学生は教員から研究指導を受ける立場である一方で、その研究・出版活動を通して彼ら自身が国の研究成果に対して多大な貢献をしていることを忘れてはなりません。

オーストラリアでは、博士課程をその取得に必要なスキルだけにとどまらず、学生が幅広い知的スキルを発達させられるように拡充する努力が行われています。これまでオーストラリアの大学では、コースワークは博士課程の一部としてほとんど課せられていませんでした。しかし現在では、高水準のコースワークを導入することによって学生の研究経験を充実させようとする大学が増えつつあります。

オーストラリアの高等教育におけるもう一つの重要な動向は、共同研究指導、および教員集団による研究指導が増えていることです。つまり二人の教員、場合によっては三人以上の教員が研究指導に関わるという方法です。こうした方策は、複数の教員による指導の方が、学生の研究プロジェクトの充実により大きく寄与できるだろうという考え方に基づいています。また、共同研究指導や集団研究指導は、ある指導教員が研究休暇をとったり、別の理由で指導教員を継続できなくなる場合でも、研究指導の継続性を保証できるという利点があります。

メルボルン大学における博士課程の学生は、「博士候補生」(PhD candidature)の認定を受けることを義務づけられています。認定試験では、候補生としてデータ収集のための準備ができていのかどうかを決定します。この認定は博士課程の早期段階で実施され、準備の時間が与えられ、学生は答弁を行います。答弁は認定審査を行う少人数の教員に対して 1~2 時間にわたって実施されます。その後で、教員は提案された研究内容について助言を行い、博士候補生にふさわしいかどうか、つまり博士論文のデータ収集に着手してよいかどうかを決定します。候補生として認定されれば、研究計画をすべて実行してよいということになります。この認定プロセスは博士論文の質保証の上で重要です。研究計画の方法論がしっかりしていて、それを実行する準備ができていることを保証するものだからです。また、認定プロセスの中で、博士論文の研究に活用できるようなアイデアが生まれる場合もあります。

大学の未来はどうなるのでしょうか？ 国際化・グローバル化している高等教育環境においては、大学間における「共同指導」の試みが増えることが予想されます。つまり、博士課程の学生は二つの大学に在籍し、二つの大学で学び、合格すれば二つの大学から学位を授与されるという仕組みです。こうした動向はグローバル化によって必然的にもたらされるでしょう。その結果、博士論文の指導教員が直面する問題は増大し、研究指導の効果的なマネジメントのあり方について検討すべき課題が増えることでしょう。

日本の高等教育セクターはオーストラリアよりもはるかに大規模で多様です。当然ながら、教育・学習に対するアプローチも異なります。それでもなお、効果的な研究指導実践に関する普遍的な指針というものは存在すると思います。どのような環境の下で最も効果的な研究指導が実現されるのかを知ることが、日本の大学および大学教員にとっても有用なことだと思います。この翻訳が研究指導という重要課題について議論を深める上で、日本のみなさまのお役に立てば幸いです。

個人的な話になりますが、メルボルン大学高等教育研究センターの教員は、高等教育研究において日本の大学や日本人研究者と近年築いてきたネットワークから多大な恩恵を受けています。私たちは相手の知識を共有・活用すること、互いに協力すること、新しい考えを進んで受容すること、互いに厚意を持って接することを尊重しています。こうした関係をこれからも続けていきたいと願っています。最後に、翻訳の労を執って下さった名古屋大学高等教育研究センターの近田政博准教授に心から御礼申し上げます。

2007年11月17日

メルボルン大学高等教育研究センター

リチャード・ジェームス      ガブリエル・ボールドウィン

訳注：各章の冒頭にある網かけ部分は、メルボルン大学の学生や教員の声を紹介したものです。

# ●●● 目次 ●●●

## はじめに

### 基礎編

1. 学生との信頼関係をつくろう
2. 学生のことを知ろう、そして彼らがどんな研究をしたいのかを把握しよう
3. 学生に対して適切で、かつ学生と教員双方が合意できるような期待を寄せよう
4. 学生と一緒に取り組み、頑健な理論枠組みと研究計画を立てよう

### 応用編

5. 学生に早めに、そして頻繁に書くように勧めよう
6. 学生と定期的に連絡を取り、良質なフィードバックを与えよう
7. 学生が大学院生活に没頭するように促そう
8. 学生に知的刺激を与え、研究意欲を高めるように支援しよう
9. 学生に研究上および個人的な問題が発生した時は支援しよう

### 仕上げ編

10. 学生の将来のキャリアについて考えてみよう
11. 学生の最終的な研究成果を精査しよう

### 付録：メルボルン大学の大学院生向けサービス



## はじめに

「学生への思いやりが大事である。」

国内外の著名な研究大学で教鞭を執ることの最大のメリットは、大学院生と有益かつ充実した研究上の協力関係を築く機会に恵まれているということです。

研究指導は研究大学の大学院において中核をなすものであり、教員の研究活動と学士課程および大学院で担当する授業をつなげる重要な存在です。両者の相乗効果こそ、メルボルン大学のような研究重点大学がまさに必要とするものです。

このガイドブックは研究指導の役割とその質向上に関してまとめたものです。大学院での研究指導は、高等教育の教育活動の中でもとりわけ複雑な形態であると断言できます。成功する研究指導のための公式、処方箋、チェックリストなどの類を積極的に評価する教員はほとんどいません。それでもなお、長年受け継がれてきた実践手法は確実に存在するのです。このガイドブックではそれらの実践手法を取り上げます。

このガイドブックは大学院での研究指導を成功に導くためのツールとしてご活用ください。本書は実践可能な方法や計画を示し、問題が発生しそうな箇所に注意を与えるためのものです。こうした点は最良の研究成果から抽出されており、研究指導の効果を高めることができます。ただちに実践できるようにするために、細かな説明は最小限に抑えました。より詳細な情報が必要な時のためのリファレンスを巻末に用意しました。メルボルン大学が卒業生や博士候補者を対象に実施した調査結果からもいくつかの傾向を読み取ることができます。

本書は、各教員にとっては効果的な研究指導にすぐに活用できるリファレンスであり、同時に各専攻の研究指導体制を検証し、見直す契機を提供する

ものです。本書の内容はメルボルン大学における他のリソースを補完し、相互に関連しあうものです。こうした他のリソースとしては、大学院本部(the School of Graduate Studies)が制作した『PhD ハンドブック』(*The Degree of Doctor of Philosophy Handbook*)、高等教育研究センターが提供する『大学院研究指導』(*Postgraduate Supervision*)などがあります。

本書が示す実践手法は、次のように要約できます。

- ・ 研究指導には良質なティーチングの要素が必要となります。たとえば学生への気遣い、学生の成長に対する関心、思慮深くかつ時宜を得たフィードバックなどです。優れた指導教員は、いかなる状況においても優れた教師としての特徴を体現しています。
- ・ 研究指導はティーチングの一形態であり、単なる情報伝達という以上の意味があります。一筋縄にいかない研究指導を継続するには、多くの時間とエネルギーが必要となります。優れた指導教員はこのことを自覚しており、研究指導を引き受けたすべての大学院生に対して専門的な指導が必要であることを理解しています。
- ・ 指導教員と学生との関係には人間的な要素が非常に多く含まれます。学生が自信喪失に陥っていたり、個人的な問題に直面している時はなおさらです。
- ・ 学生は多様な個性を持っています。個人的な好みも、指導教員との関係も、研究アプローチもそれぞれ異なります。そうした多様性は彼らの文化的背景と関係しているかもしれません。優れた指導教員は学生の多様性を認識し、尊重し、自分の経験を彼らにうまく順応させています。
- ・ 優れた指導教員は学生に高レベルかつ現実的な達成基準を示すことによって、学生自身が考える以上に彼らの能力を伸ばすことができます。学生の研究能力に自信を持たせる方法で彼らの独立心を養うのです。

- ・最後に、優れた指導教員は自らの役割をよく自覚しています。彼らは一流の研究者として模範たるべく心がけています。
- ・研究は分野によってきわめて多様です。同様に、新しい知の生成に貢献するものは何か、それをどのように表現すればよいのかも多様です。たとえば小説を書いたり、公演を行ったり、CD-ROMを制作したり、既存の研究方法に代わる新しいディシプリンを確立したり、既存の学位論文を賞賛したりなど、実にさまざまです。研究文化はこのように多様ですが、それにかかわらず、あらゆる研究活動において批判的探求(critical enquiry)は欠かせません。批判的探求は、情報を収集・精査・分析し、新しい知を提供する精力的な知的活動です。本書が重視しているのは、その知的活動を行う際の学生と指導教員の協力関係のあり方についてです。

## 1. 学生との信頼関係をつくろう

「私の指導教員は、私が独立した研究計画に取り組み、その探求のために発想や方法を洗練させるチャンスを与えてくれた。」

「大学院に入学段階で、研究テーマについて明確なアドバイスがほしかった。1年目は途方に暮れてしまった。」

「今から振り返ってみると、割り当てられた指導教員を受け入れるよりも、できることなら自分自身で指導教員を選びたかった。」

「人格を否定されたことが大失敗につながった」

学生と指導教員（一人あるいは複数）の適切な組み合わせは、大学院生の成長を促す鍵であります。それゆえ、学生と指導教員の初面談は、双方にとって決定的な瞬間です。もし初対面なら、この初面談は互いの研究関心を探り、第一印象をつかむ機会です。

この段階においては、研究テーマはまだ漠然としていることがふつうです。たしかに、最初の面談では研究テーマに磨きをかけ、それが研究に値する重要なものであるかどうかを検討することから始まるのが一般的です。学問分野によっては、指導教員が学生の研究テーマを実質的に選ぶこともあります。学生の研究に外部資金が投入されているようなケースです。そうでない場合は、研究テーマはたいてい学生自身が決定します。一般的には、研究テーマを学生に「分け与える」のは適当ではありませんが、上記の学生の意見が対照的なように、この点についてはいろいろな意見があります。メルボルン大学の大学院生に関する調査によると、彼らは独力で研究テーマを選ぶことに大きな価値を置いています。そして学生が最も成長するのは、自分の研究課題を探求する旺盛な意欲を持っている時です。だからといって、指導教員のアドバイスに耳を傾けたり、自分の考えについて指導教員から太鼓判を押してもらうことの意味は小さくありません。研究テーマが学生の将来に特に重

要な意味を持つ場合はなおさらです。

学生の研究テーマを精査する際に、教員が最初に自問すべき質問として次の5つがあります。

- ・ 私にはこの学生を指導するに足る十分な学問的な予備知識があるか。この研究は私がいまだあまり詳しくない分野に踏み込もうとしているのではないか。
- ・ 私が持っている専門的知識でこの研究テーマに必要な方法論をカバーできるか。
- ・ 私はこの研究テーマに本当に興味を持っているか。どうやったら、このテーマを自分自身の研究関心に結びつけることができるか。
- ・ 学者としての責任、特に指導教員としての責任を考えると、この学生のニーズに対して十分に応えるだけの時間を確保できるか
- ・ 私の専攻（あるいは大学）は、この研究テーマが必要とするリソースを備えているか

もちろん大学院を志望する学生側も同様に、将来の指導教員や専攻について確認しておくことが望ましいといえます。学生は教員集団の研究関心だけでなく、研究指導を受ける上で予想されるあらゆる制約（まもなく研究休暇に入る教員は誰かなど）についても知っておく必要があります。研究指導を継続して受ける際に、両者の認識不足が悪影響を及ぼすことは珍しくないからです。

上記の質問すべてに「イエス」と答えられるのは理想的ですが、現実には難しいでしょう。学生と指導教員の組み合わせが完璧なケースなど、ほとんど存在しません。両者の関係には、不断のコミュニケーション、話し合い、歩み寄りが必要です。そして、学生と指導教員ともに次のように自問することが求められます。「私はこの人物と基本的な関係を築けるか?」「十分に意思疎通できると思うか?」学生と指導教員の関係は持続可能なものでなければなりません。双方がうまくやっていると確信し、互いに信頼し、敬意を払うことが求められます。

学生はほとんどの場合、専攻長や大学院コーディネイターの教員からのア

ドバイスを参考にして、自分にとって適切だと思ふ指導教員を選ぼうとします。相互に面識がない段階で、新入生に（あるいは研究途中の学生に）指導教員を機械的に割り振るのは避けた方がよいでしょう。学生と指導教員の関係の大部分は、長期間にわたって学問的な関心が一致して、個人的相性がうまくいくかどうかにかかっているからです。正式な関係を結ぶ前に、当事者間でよく話し合っておく必要があります。もちろん、留学生や州外の学生を受け入れる場合は、指導教員をあらかじめ決めておくことが必要な場合もあります。初対面の前に電話や電子メールで連絡をとっておくのもよいでしょう。他の教員の方が指導教員としてより適任であると判断された場合は、交替することもあります。

### 共同もしくは集団による研究指導

「共同の研究指導によって、私は多くの発想、思考、観点に気づくことができた。」

メルボルン大学において単独の教員から研究指導を受けている学生の割合は、修士課程の70%、博士課程の50%です。一方、博士課程学生の約40%は2人の教員から共同指導を受けており、残り10%は3人以上の教員による集団指導を受けています。

学生の研究領域に関する専門家が専攻内に限られているような場合は、共同指導やチームによる研究指導が行われることがあります。この場合、主査となる指導教員(principal supervisor)を決める必要があります。主査はたとえ研究テーマについて完全に精通していない場合でも、研究計画や研究指導の質に関して全体的な責任を負います。したがって、研究指導上において指導教員がどこまで責任を負うのかについて学生と合意しておくことが重要です。

共同の研究指導体制(co-supervision)は、専門知識や多様な考え方を提供してくれるなど、一対一の研究指導では不足しがちな部分を補ってくれる可

能性があります。特に、学際領域の研究指導では有効です。学生は副指導教員から重要な情報提供や個人的なサポートを受けることが期待できます。この制度を設けることで、教員の異動に対しても柔軟に対応できるようになります。

もちろん、共同による研究指導がいつもうまくいくとは限りません。指導教員間に意見の不一致があるときは、学生は矛盾するアドバイスを受ける可能性があります。人間関係上の新しい要素が加わるからです。主査は想定されるトラブルに注意しながら、研究指導の舵を取ることを要求されます。

学生と指導教員が最初によく話し合っておくことによって、それぞれの役割が明確になり、そこで決められた役割は今後の話し合いの中で継続的に検討されることとなります。「博士候補者の認定委員会」(The Confirmation Committee for PhD candidates)は、両者の役割や責任について精査し、確認する貴重な機会です。また、同じ専攻に属する他の教員から研究指導上の意見をもらう機会でもあります。



## 2. 学生のことを知ろう、そして彼らがどんな研究をしたのかを把握しよう

「過去を振り返ると、メルボルン大学で研究課題に取り組んだ卒業生のおよそ3分の2は、指導教員から適切な研究指導を受けたと認識している。それよりもやや多くの者は、自律的に研究するスキルを磨く上で、指導教員から励ましや支援を受けたと回答している。80%以上は、自主的に研究を遂行できたことに満足している」

指導教員はできるだけ早い段階で、学生のニーズについて十分に調べておく必要があります。最初のニーズ調査には二つの意味があります。一つは学問的なニーズ、もう一つは心理的なニーズを把握することです。両者は必然的に影響し合っているのです。

指導教員として知っておくべきことは、

- ・ 学生が研究を遂行する上で必要な知識とスキルは何か
- ・ 学生に対する支援が特に必要な分野はどこか
- ・ 学生がどのように研究しようとしているか

最後の「学生がどのように研究しようとしているか」は、個人的な要素（研究の動機、好きな学習スタイル、自信、過去の経験、思想的立場）と社会的な要素（文化的背景、性差）の両方が組み合わさっています。

学生と早めに話し合っ、これらの点について確認しておきましょう。多くの指導教員は直感に頼りがちですが、専門分野に適したチェックリストを活用するなど、より体系的な方法もあります。

あなたの目下の関心は学生が研究に必要な知識やスキルを獲得することですが、それと同時に、あなたには学生が研究力を身につけるための訓練を施す責任があることを忘れないでください。研究が完了するまでに、学生はその分野で優れた研究者として必須の能力を備える必要があります。彼らが自

分のニーズに基づいてどのように研究を始めようとしているかを最初に把握する方法は、わりと大まかなものです。調べておくべきことは、次のような点です。

- ・ 理論的枠組に関する知識
- ・ 特定の方法論に基づいた研究手続き、その選択肢
- ・ 必要とされる技術（たとえば統計分析の手法、実験装置の利用法など）
- ・ 必要とされるコンピュータスキル
- ・ 文章作成のスキル

指導教員がすべての学生に周知させるべき大学の方針として、「メルボルン大学の労働衛生・安全方針」(the University's Occupational Health and Safety Policy)があります。この方針は、知的財産の取り扱い、人間や動物を実験する場合の研究倫理、データ・記録の収集・保存を行う際の実践上の責任などについて取り扱っています。メルボルン大学はこれらの問題について、広範囲にわたる支援とリソースを提供しています。学生向けのウェブサイトも章末に掲載しておきます。

もし研究指導の初期の段階で学生に深刻な知識不足やスキル不足があるとわかった場合は、そのことをすぐに彼らに伝えるべきです。たとえば、知識不足は系統的な読書計画を立てる上で鍵となります。特定スキルの向上に指導教員が大きな役割を果たすことはもちろん、大学側も多くのプログラムを提供しています。学生が必要とするサポートは何かを知りましょう。そして、問題点を早く見抜き、彼らに適切な行動をとるように念を押すのです。

こうした事前指導は問題点の改善だけが唯一の、あるいは中心的な目的ではありません。同様に重要なのは、学生の長所を理解することです。指導教員は学生のあらゆる面の意欲をかきたて、彼らがもともと優れている部分も含めて、その能力を伸ばしてあげましょう。学生はこうした指導にとっても満足することでしょう。

学生の心理的なニーズを知ることは、学問的なニーズ以上に難しいかもしれません。どんな場合でも、それを察知するには一定の時間がかかるでしょう。たとえば、一見落ち着きがあるが自信がまったく欠如しているという学生の場合、データ解釈の際にいつまでもデータ収集をやめられないという事態になってはじめてそのことが露呈します。指導教員と学生の関係がうまくいくかどうかは、結局のところ、教員の感受性と機転にかかっているといえます。意識的な目配りが必要なこともあります。意見の不一致が起こりやすい部分や、学生の状況に共感できる部分を認識しておくことが、問題の深刻化を防ぎ、その解決に役立つかもしれません。

そうした点の一つにジェンダー問題があります。女性があまり進出していない男性中心の分野では、指導教員が積極的に相談相手となり、女子学生が経験しやすいプレッシャーを敏感に察知することが特に重要となります。

もう一つ言えることは、指導教員と学生というそれぞれの役割に対する期待値、および両者の間の適切な礼儀作法が、文化的背景によって異なるということです。メルボルン大学は教職員と学生の文化的多様性によって作り出された多彩なコミュニティです。あらゆる学生は教授－学習について、および教員－学習者の関係について、自らの文化に基づいてそれぞれの期待を抱いています。むしろ、教員側も文化的に作られた準拠枠を持っています。

メルボルン大学における外国人留学生の出身国は 90 以上に及び、その大多数は東南アジア諸国の学生です。こうした留学生の多くはオーストラリアで学ぶにあたり、教授－学習のあり方について何かしらのイメージを抱いており、そのイメージはオーストラリアで主流となっている教育スタイルとはいささか異なっています。たとえば、学生の個人的信条について、指導教員は異議を挟むべきではないでしょう。こうした問題は、常にステレオタイプの議論に陥る危険性があります。それだけになおさら、外国人留学生が抱いている個別のイメージに留意する意味があるのです。文化的違いは次のような幅広い場面で表れると指摘されています。

- ・ 指導教員の権威がいかにほどで、どれほどの敬意を示すのが妥当か

- ・ 指導教員と意見が一致しないことを、学生はどのくらい重く受け止めるか
- ・ 出版物の権威をどう活用するか

この問題に関する研究成果をまとめ、教員向けに実践的なアドバイスを  
行う詳細な指針がいくつかあります。最も役立つのは、Brigid Ballard と  
John Clancy が 1991 年に出版した『留学生への教授法：授業や研究指導の  
ための基本ガイド』(*Teaching Students from Overseas: A brief guide  
for lecturers and supervisors*)でしょう。

メルボルン大学の「文化的多様性に関する方針」(Cultural Diversity  
Policy: <http://www.unimelb.edu.au/diversity>)の目標の一つは、文化的多  
様性が学内で理解され、それを探求する環境を保証することです。指導教員  
には自身の学問的基盤に文化的多様性の考え方を反映させ、これについて学  
生とよく話し合うことが求められます。おそらく、指導教員にとって最も役  
に立つ方法は、学生とよく話し合った上で、教員と学生がともに学習と適応  
のプロセスを体験することが必要だと認めることです。この体験には相互の  
理解と支援が欠かせません。そして、この方法が正しいものであり、時間  
を要するということを受け入れる必要があります。

## 研究の必需品

### 研究データと保存

<http://www.research.unimelb.edu.au/>

研究データの収集、保存、利活用に対しては、大学と研究者の双方が責任  
を負います。研究成果が出版されてから少なくとも5年間は、研究データ・  
記録を保存することが推奨されています。このことによって、研究者間でデ  
ータや研究方法について議論したり、再検証することが可能になります。

メルボルン大学の「研究実施綱領」(Code of Conduct for Research)  
は、研究における倫理的行為の基準について規定しています。その中には、

データ収集とその管理についての特定条項も含まれます。「研究データ・記録管理のためのガイドライン」(University Guidelines for Management of Research Data and Records)は、データや実験記録の保管・保存のための方針や方法を定め、各専攻の研究を支援しています。

## 研究倫理

<http://www.research.unimelb.edu.au/>

メルボルン大学において人体や動物を実験対象とした研究を行う場合は、研究を始める前に、「人体研究倫理委員会」(Human Research Ethics Committee)あるいは「動物実験倫理委員会」(Animal Experimentation Ethics Committee)の認可を受けなければなりません。場合によっては、そうした申請は附属病院の適切な委員会に諮られることもあります。研究計画が完成し、実際に研究を始める前までに認可を受けなければなりません。

## 知的財産

メルボルン大学は著作権のあるものを除き、学生が作り出したあらゆる知的財産を所有しています。著作権がある場合(コンピュータのプログラムを含む)は、それを作成した学生に帰属します。知的財産に関するこうした取り決めはさまざまで、学生に奨学金や研究費を支給した機関が特定の知的財産上の条件を設けていることがあります。重要なことは、研究資金を提供する機関が知的財産に関する諸条件を定めているということ、学生が知ることです。

「メルボルン大学内規」(The University of Melbourne Statute)第14章における知的財産に関する規定は、<http://www.unimelb.edu.au/ExecServ/Statutes/>でご覧いただけます。この規則を管理しているのは、大学の知財担当者です。何かご不明な点があればお尋ね下さい。「メルボルン大学 大学院生協会」(The University of Melbourne Postgraduate Association)が作成している知的財産に関する一連のパンフレットは、一般的な情報を知

るのに役立ちます。

### 労働衛生・安全

<http://www.unimelb.edu.au/ehsm/>

メルボルン大学の学生は大学が定めた労働衛生・安全方針を守る必要がありますと同時に、この方針に基づいて安全な労働、研究、実習を行う責任があります。学生は自分の属する専攻の労働衛生・安全上の方法に習熟し、火災、爆発、放射能漏れ、バイオ・ハザード、化学物質による汚染などによって引き起こされる危険性を最小限に抑えることが要求されます。



### 3. 学生に対して適切で、学生と教員双方が合意できるような期待を寄せよう

最近起きた事例をみてみよう。複数の学生と指導教員からなるグループが、両者の関係について率直に意見交換する機会をもった。そのとき、ある指導教員が意気消沈していた。彼はある留學生が実際以上に、つまり指導教員が適切と感じる以上の研究指導を期待していることを知った。彼はこの留學生と18ヶ月にわたって一緒に研究を行ってきた。期間中、この留學生は指導教員のことを怠慢だと認識していたようである。

「最初のうちは、先生にもっと指導してもらいたいと思っていたけど、研究・分析・解釈するのに必要なリソースを見つけたことが今になって役に立っていると思う。」

「先生ともっとたくさん話をしていれば、もっと早く論文を完成できたかもしれない。しかし、そうしていたら今と同じ質や価値を持つ論文を書けたかどうか疑わしい。手際よく書くことがよいとは限らない。」

指導教員と学生の関係で最も満足度が高いのは、学生と指導教員間の「通信回線」がすみやかに、かつ明確に敷設されたときです。

最もストレスがたまるのは、両者が相反する目的に向かって活動しているときです。連絡したことを互いに誤解したり、学生は指導教員が何を望んでいるのかわからずに混乱し、腹を立てたりします。他方、指導教員は学生の研究内容や態度に失望することになります。

適度な研究指導に対する期待値の不一致という、このありふれた問題を解決するのは容易ではありません。たしかなことは、指導教員と学生が和解するためには、その前に研究指導に対する期待について、双方の調整が必要だということです。初めて研究に取り組む学生にとっては、研究指導という学習形態が組織的なコースワークとはまったく異なるものであるということ

知らないかもしれません。研究指導を受けるにはより大きな自立心が必要とされる一方で、コースワークのように確実な知識を得られるわけではないからです。こうした問題は、指導教員が学生に対する期待を一方的に説明しても解決にはなりません。もちろん、指導教員は研究とは何かについて、学生よりもより多く経験と深い理解を持っています。それでも、研究指導の全期間を通して、研究の見通しや見解を常に共有することが求められるのです。

どうやったら指導教員と学生の協力関係がうまくいくかについて意見交換する公の機会を設けることは重要です。その際は、どのくらいの頻度で学生は書いたものを指導教員のところに持っていくべきか、どのくらいの頻度で研究指導を受けるべきかなど、比較的単純な問題から議論を始めるのがよいでしょう。指導教員には望ましい研究についての明確な考えがあるでしょう。しかし、学生の置かれている状況や彼らが好む学習習慣についても考慮する必要があります。たとえ指導教員の方がはるかに経験豊富であっても、双方が話し合うことが大事なのです。

研究指導への期待について、指導教員と学生の間で調整と話し合いが必要な部分は次の通りです。

- ・ 研究指導の頻度とスタイル
- ・ 学生の自立の度合い
- ・ 学生からの相談－受け付ける頻度、相談を受けるのに必要な準備、相談の実施（相談を受ける場所、研究室でどのくらいのサポートを受けられるか）
- ・ ペーパーの提出（進捗レポート、先行研究の分析、論文の草稿など）
- ・ 指導教員からの応答スタイルとタイミング
- ・ 学生が論文を編集する際に指導教員がどのような役割を果たすのが適切か
- ・ 指導教員と学生の間にあるイデオロギー上の違いをどう乗り越えるか

こうした期待は時とともに大きくなりますので、一度ならず、何度か話し合う必要があります。研究上で必要なリソースについても話し合い、利用可

能な資源、利用コスト、新しい装置や消耗品の購入可能性について、学生に適切な情報を知らせなければなりません。研究スペースやコピー機などの施設利用についても説明が必要です。

こうした点の多くはメルボルン大学の「博士候補者に関するガイドライン」(Guidelines on PhD candidature)の中で触れられています。このガイドラインは博士課程の研究指導に限定していますが、ここで示されている一般指針はあらゆる段階の研究指導に適用できます。一般指針は役に立つ基本を明示しており、したがって汎用性も大きいのです。個々の研究指導で必要とされる詳細な解釈については、当事者間で話し合えばよいでしょう。

指導教員と学生の双方の期待を明確にし、合意を図り、定期的にチェックし、見直しを図るといふ点でとりわけ重要なのは、論文完成までのタイムテーブルです。完成までの時間が長引くことは、学生も大学も望んでいません。学生と指導教員にとって適切（および不可欠）なのは、論文作成の計画を立て、制作スケジュールに沿って進捗状況を定期的にチェックすることです。上手な計画を立てることにあまりこだわる必要はありません。研究というものはたいていの場合、予測不可能だからです。また、計画を立てることによって研究の質が阻害されてはなりません。とはいえ、時間という要素が最も重要なことは言うまでもないことです。

研究への期待に関する議論を始めるには、Ingrid Moses が開発した「論文作成における指導教員と学生の役割に関する認識」(the Role Perception Rating Scale)が役に立ちます。後で紹介しますが、この手法では指導教員と学生の両方が、主要項目について自分の考えを示すことを求められます。その後で、特に大きな意見の相違がみられた項目について議論をします。あらゆる質問紙調査と同様に、このアンケートも複雑な問題を単純化せざるをえなかったことを開発者自身が認めています。しかし、そのことはほとんど問題ではありません。なぜなら、このアンケートに回答することによって人々は話し合うようになり、いかなる問題も誠意と率直な意見交換によって解決できるという説得力あるメッセージが伝わるからです。

学生が自立するにつれて研究指導に対する期待も変化するので、この種の調査票は再度必要になるかもしれません。後の段階では、もっと柔軟性の高いアプローチが適切でしょう。まず指導教員がなすべきことは、現状調査のための意見交換を提案し、その中で学生との協力関係を吟味し、できることなら新しい関係を取り決めることです。研究プロセスを評価するためには、たまには研究内容から一歩離れてみることも効果大です。メルボルン大学のいくつかの専攻では、あらゆる研究計画を定期的に評価しています。この評価は指導教員と学生の意見の相違を排除するものではないし、指導教員の代わりになるわけでもありません。むしろ、指導教員の役割を支援しているのです。

もし、研究指導に対して学生が一般的に抱く期待について知らない場合は、次のリストが役に立つでしょう。このリストは、Phillips と Pugh が英国での研究をもとにして作成したものです。ここに挙げられているのはごく一般的な期待内容であり、一人一人の学生が抱いている特有の期待について指導教員が知ることを妨げるものではありません。

### 学生は指導教員に何を求めているか？

Phillips, E.M. and Pugh, D.S. (1987) , *How to get a Ph.D.*, Open University Press.

学生は研究指導を受けたいと思っている

学生が指導教員に期待することは、

- ・ 研究指導の前に学生が書いたものを熟読してくれること
- ・ 学生が必要とするときに会えること
- ・ 学生に対して友好的で、寛容で、支援してくれること
- ・ 前向きの批判をしてくれること
- ・ 学生の研究分野について十分な知識を備えていること
- ・ 学生と意見交換しやすい状況を作ってくれること
- ・ 研究指導の際は、電話で中断したりせず、誠意を持って学生に対応する

- ・ 学生の研究内容に大きな関心を持ち、多くの情報を提供してくれること
- ・ 最終的には、学生がよい職に就けるように尽力してくれること

### 論文作成における指導教員と学生の役割に関する認識

Role perception rating scale

By Ingrid Moses (1985), Supervising Postgraduates, HERDSA Inc.

#### 手順

次の各項目にある二種類の説明を読んでください。それぞれは、指導教員が選択しうる考え方を示しています。どちらの側にも全面的に賛成できない場合があると思いますので、自分の立場を判断して、5段階の評価尺度のどれかに印を付けてください。たとえば、設問 1：研究テーマを指導教員が選ぶべきだと強く思う場合は、尺度 1 に○をつけてください。

研究テーマ		評価尺度	
1.	有望なテーマを選ぶのは指導教員の責任である。	1 2 3 4 5	有望なテーマを選ぶのは学生の責任である。
2.	最も適切な理論枠組みを決めるのは、最終的には指導教員の手に委ねられる。	1 2 3 4 5	たとえ指導教員と摩擦が生じても、理論枠組みは学生自身が決めるべきである。
3.	指導教員は適切な研究・学習プログラムの開発において、学生を導く役割を担う。	1 2 3 4 5	指導教員は学生がアイデアを考える上で、主として反響板としての役割を担い、助言を行う。
<b>学生との関係</b>			
4.	指導教員と学生の関係は研究上の内容に限定すべきで、個人的な問題を差し挟むべきではない。	1 2 3 4 5	指導教員と学生が個人的に親しい関係を築くことは研究指導の成功に欠かせない。

3. 学生に対して適切で、学生と教員双方が合意できるような期待を寄せよう

5.	指導教員は学生と頻繁に会うようにするべきだ。	1 2 3 4 5	指導教員がいつ学生と会うかは学生の都合による。
6.	指導教員は学生がどんな問題を抱えているのかを常に知っておくべきだ。	1 2 3 4 5	学生には自由に研究を進める機会を提供すべきであり、時間をどのように使っているかを指導教員に説明する必要はない。
7.	学生が無理な研究計画を立てているとわかった場合、指導教員を降ろることができる	1 2 3 4 5	指導教員は、たとえ論文に問題があっても、最終的に論文を提出するまで学生を支援すべきである。
<b>論文の内容</b>			
8.	指導教員は論文を最短期間で仕上げるように指導すべきである。	1 2 3 4 5	学生が着実に研究を続けているなら、必要なだけ時間を費やしてもよい。
9.	指導教員は論文の水準について直接的な責任を負っている。	1 2 3 4 5	指導教員は助言を行うだけで、論文の内容、形式、水準に関しては、すべて学生に委ねる。
10.	論文を評価するためには、指導教員は論文のあらゆる部分の草稿に目を通す必要がある	1 2 3 4 5	指導教員に建設的な批評を求めるのは、学生しだいである。
11.	指導教員は学生が困難な状況にある場合は、実際に論文を書くのを手伝うべきだ。	1 2 3 4 5	指導教員は学生の論文作成に深入りすることに慎重であるべきだ。

## 4. 学生と一緒に取り組み、頑健な理論枠組みと研究計画を立てよう

「私の指導教員は論文の基本要件について丁寧に説明し、私が土壇場で失敗をしないような執筆計画を立てるように勧めてくれた。」

指導教員として最初になすべき仕事の一つは、学生に専門のディシプリンに基づいて研究を実践させ、必要な研究倫理を身につけさせることです。ほとんどの学生は研究を始める上で入念な指導を必要としています。独力で優れた研究構想を立てられる学生は例外的です。研究指導の第一段階には、指導教員と学生が共同で研究計画を立てることも含まれるのです。そのねらいは、研究計画の内容について両者が合意することです。PhDや専門職学位を取得するには、研究計画を書くことが義務づけられています。多くの専攻では、それ以外のタイプの学位を取得する場合でも研究計画が必要です。研究計画を書くことが義務づけられていない場合でも、学生に作成させる方がよいでしょう。

研究計画を立てる最初の段階では、前提条件をはっきりさせ、適切な仮説形成を行うことがきわめて重要です。さらに分野によっては、調査データの収集・記録を行うための概念枠組みを決定します。こうした研究枠組みを作る段階は、「基本的文献の講読と書き出し」(exploratory reading and writing)の時期と呼ばれます。指導教員は学生が適切な文献講読をするように指導する必要があります。学生が自分の研究分野を探索し、その可能性を理解するようになったら、自由に書かせてみるのがよいでしょう。もちろん、研究計画を立てる段階で要求される内容は学位の水準によって異なります。副専攻の研究プロジェクトの場合なら、それほど学生の重圧にはならないでしょう。まだ最初の段階ですが、学生がコンピュータを扱う際に悲惨な失敗をしないように、定期的にバックアップをとり、データを保存しておくように推奨しましょう。

この段階に費やす期間について絶対的な基準はありませんが、慌てる必要

はありません。指導教員は学生が知的探求する自由と現実との妥協を図らなければなりません。研究テーマについての文献読み込みが足りない学生は、同様の研究論文を誰かがすでに行っていると気づくのが遅かったことに落胆することでしょう。リスクは他にもあります。学生は回答すべき問いを見失うかもしれません。あるいは、理論的に浅薄な研究になるかもしれません。十分な概念理解を欠いたデータ収集に着手する学生は、得られた情報を分析・解釈する際に苦勞するかもしれません。

研究計画を立てるというプロセスは研究生活全体を通して繰り返し行われます。最初の段階であまりに窮屈な研究計画を立てるのは良策ではありません。後になってから、最初に考えた計画を変更したり、放棄することが多いからです。指導教員に求められるのは、学生が概念の全体像を正確に把握し、その研究が関連文献のどのあたりに位置づけられるかを理解できるようにすることです。

正式な研究計画の分量や様式は、学位の水準や、科学的・技術的な調査を企画するかどうか、哲学的な議論を行うかどうか、新しい理論枠組みを提供するかどうか、創造的な作品（舞踊、著作、映画など）を創り出すかによって大きく異なります。同様に、研究計画が詳細かどうかは、学生がどの程度自立しているかに左右されます。大づかみに言えば、研究計画には次の内容が含まれます。

- ・ 問題点あるいは論点の所在、それらが研究に値するかどうかの説明
- ・ 先行研究に関する記述
- ・ 明確な研究課題あるいは研究対象
- ・ それらを研究するための方法論、必要な施設・設備の明確化
- ・ 実現可能なスケジュールと到達可能な目標

立案した計画に人間や動物に対する実験が含まれる場合は、倫理委員会の承認（12 ページ参照）を得るための申請書を作成する作業を通して、自分の考えを明らかにします。また、論文の章構成や概略を準備する作業を通して、

論文の構造が明確にします。

研究計画の指針に関する知識を早めに身につけておくことは、あらゆる学生にとって役に立ちます。学生が活用できる手引きはたくさんあります。多くの専攻では大学院用の学生便覧にこうした手引きを掲載しています。研究計画の基本型については後で概略を述べます。

学生が綿密な研究計画を書き上げるまでは、その研究を進めてよいというゴーサインを彼らに与えるのは賢明ではありません。研究計画は、学生や指導教員が次のような問いをクリアできるように頑健なものでなければなりません。

- ・ 必要とする学位の水準からみて、研究の範囲が適切かどうか
- ・ 本当に研究に値する内容かどうか (知識ベースで重要な進歩が見られそうか、この研究が学生のキャリアに役立つかどうか)
- ・ 方法論は実行可能で、扱いやすいか
- ・ 必要に応じて、大学の倫理委員会から承認を得られそうか
- ・ 研究に十分なリソースがあるか (たとえば、一次資料が入手可能か)
- ・ 十分なデータを収集することができるか
- ・ 研究スケジュールは適切か

堅実で全体を把握した精緻な研究計画が作り出されるまでは、学生と頻繁にミーティングの機会をもつ方がよいかもしれません。とくに博士課程の学生にとっては、研究計画を立てるプロセスは博士候補者(candidature)として認定されることにつながるので、入念に行う必要があります。

駆け出しの研究者にとって、研究計画を立てることは容易なことではありません。研究者はこの時期に心許なさや挫折を感じる場合があります。データ収集に取りかかることに不安な学生の場合はなおさらです。指導教員は学生の研究プロセスを注意深く観察しなければなりません。そして、学生が見込みのないテーマや無茶なテーマにはまらないように、丁寧に導いてあげる

ことが大切です。このことは慎重を期す必要があります。指導教員が豊かな経験をもっている一方で、学生が最先端のアイデアを持っていることもあるからです。もし指導教員が革新的なアイデアや思考の芽を事前に摘んでしまうようなことになったら、それは大変残念なことです。他方、学生があまりにも高望みをして、自分の手に負えないような問題設定をすることもあてられよう。それから、指導教員は絶望的になっている学生にも鋭い目を向ける必要があります。学生は自分の研究分野にあまりにも多くの先行研究が存在することに圧倒され、新しい知見を創り出す自信を喪失してしまうかもしれません。

研究計画書を書くことは、学位論文をめざして継続的な議論を行う上での最初の一步です。最終的に整合性のある研究計画を立てられたときは、研究計画としては一応の水準に達しており、これから始まる研究や執筆が暗中模索というようなことはないでしょう。興味深いのは、大学院修了者の約半数が、学位論文を成功させるのに必要な情報と助言を得ることができたと思っていることです。幸運にも、彼らは納得できる学位論文を書くことができたわけです。それでもなお、研究プロセスと求められる水準について多くの学生が不安を抱いていることを、教員は知っておくべきでしょう。こうした悩みに対処するには、指導教員は学生に具体的な提案を行い、初期の段階でしっかりとした研究計画を立てさせることです。この過程を通じて不安も和らぐことでしょう。

## 研究計画を立てるためのガイド

Moses, I. (1985) *Supervising Postgraduates*, Campbelltown: HERDSA Inc.より引用

\* 研究課題の四要素（4～14 ページにわたり、次の順序で構成される）

### ・序文

学生は問題の所在をできるだけ簡潔に述べます。なぜその問題を重要だと考えたのか。自分の研究が問題解決にどのように貢献するのか。

- ・ 研究課題（あるいは仮説）  
疑問文の形式で、2つ以上の概念、変数、現象、事象の関係性を問います。  
ここでは専門用語の定義づけも行います。命題を立てる際には細心の注意が必要です。命題は研究活動の目的を決定づけ、学生を正しい方向に導くものです。
- ・ 副次的な研究課題（あるいは副次的な仮説）  
主たる研究課題と同様に、仮定的に表現します。
- ・ 関連する研究や理論のレビュー  
どんな研究者も先人と同時代人の研究から大きな恩恵を受けています。彼らの功績を認めることは有用かつ適切なことですが、つい自分の研究とほとんど関係のないものまで取り上げてしまいがちです。その結果、研究計画において先行研究の検討は、時として支離滅裂なものになるか、多少の注釈がついた単なる文献リストに陥ってしまいます。これでは十分とはいえません。必要とされるのは、引用した理論や研究がこれからやろうとしている研究にとってなぜ重要なのかを説明する統合的なメッセージなのです。

\* 論文執筆の手順（4～14 ページ）

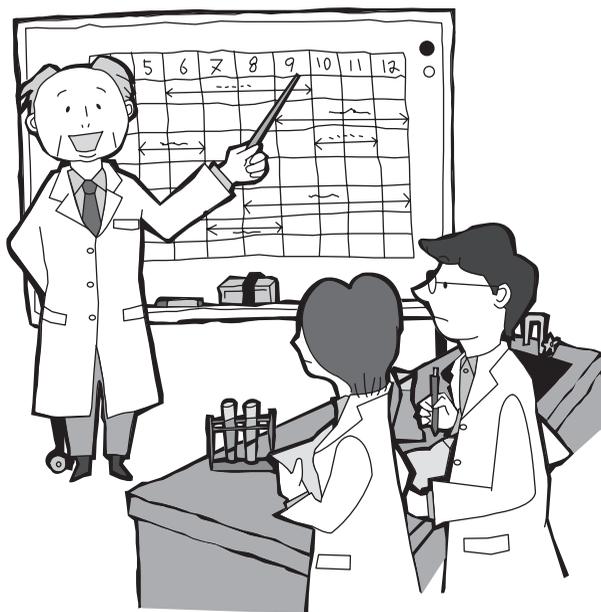
- ・ 理論・概念枠組みに関する説明
- ・ 主張の根拠となる文献や出典
- ・ 分析手法と研究構想
- ・ 学位論文を完成させるためのスケジュール表

\* 仮目次（1～2 ページ） 仮目次を立てることは次の3つの利点があります。

- ・ 論文の主題がもつ規模を読者に伝える
- ・ 論文全体の構成を執筆者に意識させる
- ・ ノートに記録する手間を省く

\*文献目録（1～5 ページ）

- ・文献目録に部分的な注釈を加えることもあります。文献目録をすることによって、指導教員は出典文献の水準に関する見解をまとめたり、学生が見落とした文献のうち重要なものを指摘できるようになります。予備的な文献目録を作るには時間と労力が必要です。予備目録は、学位論文と同時に作成する総合的な文献一覧の土台となります。



## 5. 学生に早めに、そして頻繁に書くように勧めよう

「私は指導教員に恵まれた。指導教員は私の背中を押すタイミングや、私が自分自身について理解するタイミングを把握していた。」

学位論文の研究で必要とされる執筆方法は、学問分野によって大きく異なります。いくつかの研究分野では、学位論文や報告書は長期間にわたる実験や分析から得られた結果をまとめます。他の分野では、執筆すること自体が研究になります（膨大な時間を読書に費やしますが）。このため、効果的な論文執筆の方法を一般化することは困難です。

しかし、あらゆる学問分野を通じて、早めに書くこと（書くという作業自体であり、必ずしも論文の各章でなくてもよいのです）と、書いた内容を定期的に指導教員に見せることが大事です。データやアイデアが蓄積するにつれて、それらを文章にまとめ上げることに怖じ気づくようになるという心理的な傾向は、こうした対策によって回避できるようになります。研究課題が大きすぎると、学生が書き始めるのを後回しにして、データ収集を継続したり、さらなる読み込みを行ったり、まるで蜃気楼を追い続けるように、新しい課題を増やし続けるという悪循環に陥ってしまうのです。

人文科学や社会科学の多くの分野では、「実験結果をまとめ上げる」という概念が適切でないこともあります。これらの分野では、論文を書き出していない学生は、すなわち研究自体を始めていないということになってしまいます。

「実験結果をまとめ上げる」ことが適している分野においても、先行研究のレビュー、概念枠組みなど、学会発表や論文のもとになる論文の個別部分について、早い段階でたくさん書いておくことが望ましいでしょう。早めに書き始める習慣をつけておくと、実験やフィールドワークを行う際に、研究ノート・記録や細かな研究方法をすぐに高い完成度に洗練させることができ、後で論文に取り込むことが容易になります。

学位論文を書く時は、たいていの場合、まず文献レビューから始めるのがよいでしょう。学生は通常、研究の最初の段階で多くの文献を読み込みます。それは、自分の研究計画が先行研究の森の中のどこに位置するかを把握するためです。文献レビューにおいては、書くという作業は初日から始まっているのです。読んだ文献については単にメモするだけでなく、論文にすぐに活用できるように批判的に要約した内容を残しておくことが望ましいといえます。当然ながら、多くの文献に親しむにつれて、学生の理解力や判断力は高まります。時には、最初の考えを根本的に見直したり、捨て去ることが必要になるかもしれません。しかし、こうした努力は無駄にはなりません。進歩した記録こそが貴重な財産なのです。こうした経験を通して、簡潔で的を絞った執筆をする習慣が身につくことでしょう。

指導教員は早い段階から学生が書いたものを論評してあげるべきです。インフォーマルな文章に関するコメントはつねに形式張らずに簡潔な方がよいので、指導教員にとって大きな負担にはならないはずですが、むろん、大きな問題が発生したときは、その問題を見つけ出し、対処することが求められます。たとえば、基本文法や文章表現、文章作成スキルに難のある学生には、各種の補修コースを履修するのがよいでしょう。英語力に問題がある学生は、「学習支援室」(Learning Skills Unit)や「英語を母語としない学生のための英語学習センター」(Centre for Communication Skills and English as a Second Language)が対応します。「大学院本部」(The School of Graduate Studies)や「大学院生協会」(Postgraduate Association)も、大学院生のためのスキル向上プログラムを提供しています。

この段階における指導教員の重要な役割は、学生が学位論文という特殊な文章を書く上で、自分に適した執筆スタイルを身につけ、自分なりの見解を持てるように支援をすることです。各専門分野には独自のルールがあり、こうしたルールには、一人称あるいは三人称のどちらで語るかというような単純な問題をはるかに超える複雑さがあります。理想的な文体をどうやって書くかは、容易に説明できるものではありません。この点については、それぞれの専門分野で模範となるような論文を読むことを通して学ぶことができま

す。また、学生が書いたものに対して、必要に応じて別の言葉で書き直すように提案したり、なぜその形式が望ましいのかを説明するなど、学生に早めに返答することが学生を支援することにつながります。

### 執筆上の障害をうまく避けるには

本章で説明した「早めに書く」という方策は、執筆上の障害物が増えるのをいかに防ぐかという点で、大いに威力を発揮します。研究のプロセスというものはいつ麻痺状態に陥ってもおかしくありません。

仕事に忙殺されたり、家庭の用事が入ったりと、執筆を妨げる要因はたくさんあります。しかし、一貫して学生を妨げるのはたいてい学問的な困難から生じる問題です。たとえば、資料の扱いに関する自信のなさであったり、特定概念に関する問題であったりします。言うまでもなく、学問的な要因と個人的な要因は相互に絡み合っています。

もし学生が論文の中心となるコンセプトについて戸惑っていたり、あるいは議論の論理を明確にできていない場合は、指導教員は問題が解決されるまで積極的に指導的役割を果たす必要があります。すなわち、問題点について学生と話し合ったり、別の解決方法を提案したり、学生に徹底的に考えさせるために一連の論点を検証するなどの方法が考えられます。

もし学生を学問的な行き詰まりから脱出させる必要があったり、学生が書くことから逃避し続けたり、その問題が自信の欠如や不安感に由来するものであるなら、この破滅的な回路を断ち切るには行動主義的なアプローチが有効かもしれません。比較的扱いやすい小トピックを一つ選んで、それについて短期間のうちに1ページにまとめるように学生に指示するのです。あくまで個別の事例ですが、うまくいけば具体的な方法に精緻化できるかもしれません。あるいは、これと関連する別のトピックについて同様の指示をすることもできるでしょう。大事なことは、手に負えないほどの大きな課題を、不安なしに扱うことができる程度に小さく分解するということです。もちろん、

これは問題を解決する上での暫定的な段階にすぎません。

上記の方法のすべてが水泡に帰したときは、学生をあなたの研究室の近くに座らせて、必要なページを書くのに1時間だけ与えましょう。そのとき、一杯の紅茶が励ましになるかもしれません。



## 6. 学生と定期的に連絡を取り、良質なフィードバックを与えよう

メルボルン大学の調査によれば、大学院生の約4分の3は学位候補者(candidature)になった時の研究指導の頻度について満足しています。最新の統計データによれば、修士課程の学生の64%は毎月1回以上、全体の3分の1以上の学生は少なくとも2週間に1回の頻度で指導を受けています。博士課程の学生の場合は、28%の学生は毎週1回以上、80%以上が毎月1回以上の研究指導を受けています。

概して言えば、メルボルン大学の大学院生の70%は完成した論文に関して行われたフィードバックの質に満足しています。同様に70%の大学院生は教員がフィードバックに要した時間についても満足しています。

全体としては、大学院の卒業生の6人に1人が研究指導についての指導教員の対応に何らかの不満を抱いているようです。

多くの経験豊かな指導教員は、学生と頻繁かつ定期的に連絡を取ることが、研究指導を成功させる上で唯一かつ最も重要な方法であると確信しています。たしかにそれは事実ですが、すでに高度に自立している学生が必要としている研究指導は、研究計画全体の中で特に重要な部分のみかもしれません。

両者が連絡を取る上での一義的な責任は指導教員の側にありますが、もちろん学生も責任を負っています。学生との関係を保つには、面談を不当に強要したり、あるいは一切面談しないということがないように、適度なバランスを保つことが必要になります。面談の頻度についても判断が求められます。

学生や指導教員の中には、隔週あるいは毎月といったように、定期的に面談を設定することを好む人がいます。多くの実験室において、技術的な問題解決や研究方法を工夫する上で指導教員が実質的な役割を果たしているときは、毎週あるいは毎日学生に会うことが望ましいかもしれません。定期的な

面談する中で成長していく学生は、確実に存在します。一方、必要な場合のみに面談することを好む学生もいます。この方法にはリスクが伴いますが、自分から面談を提案できる自立した学生の場合は有効かもしれません。特に社会人の学生には、教員と連絡を取る上で電子メールを用いるのもよいでしょう。

時宜にかなったフィードバックは、研究の勢いを持続させ、正しい方向に導く上で重要です。会議形式、研究室での会話、ランチ形式、電子メール、電話、ファックスなど、フィードバックの方法は個々の指導教員によって異なります。しかし、フィードバックの本質は変わりません。当然ながら、学生は自分のアイデアを発展させることに神経質になりがちで、草稿の段階では多くの不安と疑問が潜在しています。思いやりのない批判や対案のない批判に対して、学生が反発することもあります。学生がフィードバックで期待しているのは、研究が順調に進んでいることを確認してくれたり（うまくいっている研究を確認するのは容易です）、曖昧な部分を指摘したり、それに対処する方法を提案してくれることです。

指導教員からのフィードバックの方法は、特定の問題に関する具体的なコメントもあれば、研究が順調に進んでおり、その研究に価値があることを必要に応じて厚意を持って再確認する方法もあり、多種多様です。こうしたフィードバックは、学生が研究において具体的な困難に直面している際や、個人的なストレスや緊張を抱えている際にとくに重要です。

フィードバックはすぐれた教育者が活用する強力な方法です。最良のフィードバックは、自分に何が可能なのかを探求する道へと学生を誘い、彼らの背中を押し、駆り立ててくれます。この種のフィードバックが直接的に解答を与えてくれることはめったにありませんが、その代わりに、学生が自分自身でそれを発見するように仕向けてくれます。このようなフィードバックは、最優秀かつ最も自立した学生にとっても必要です。一方、最悪のフィードバックは学生の意欲をくじき、あるいは次に何をなすべきか、学生はすっかり悩んでしまいます。指導教員が学生の論文に軽く目を通すだけ、あるいはせ

んぜん読んでくれない場合、苦心して論文を書き上げてきた学生が落胆するのは当然のことです。

フィードバックには口頭の場合と文字に表す場合があります。実験室の中で研究を行うタイプの学生は、口頭のフィードバックや支援を多く受けることが多いでしょう。口頭のフィードバックは有益かつ必要ですが、それだけでは十分とは言えません。あらゆる学生は正式な研究相談の恩恵を受ける権利があります。そしてもちろん、都合のよい時間と場所において後で検討できるという点から、書面での詳細なコメントも必要としています。学生は研究指導の面談あるいは実験室の長椅子に座って議論される内容の多くを納得しているようにみえますが、議論が終了した時には指導教員に圧倒されたような気分になるかもしれません。特に具体的な問題は、書面でのメモがないとすぐに忘れてしまいがちです。

### 研究指導の効果を最大限に高めるために、その道筋を書き出してみよう

- ・可能であれば、たたき台となる研究計画をあらかじめ学生と作成しておく
- ・研究室を学生との面談にとって快適な場所になるように整える。電話など、研究指導の注意力をそらす要素を取り除く
- ・常に学生の意欲を確認し、元気をなくしている兆候を見抜く
- ・毎回の研究指導の時間について合意し、その取り決めを守るようにする
- ・学生の研究内容に精通することによって研究指導に備える
- ・形式張らずに広範囲にわたってアイデアを探求する。多くの学生によれば、この作業が研究指導の最も貴重な一面であると指摘している。
- ・毎回の研究指導の重要課題や決定事項を記録し、学生にコピーを渡す。この記録は教員の備忘録になるだけでなく、学生が議論内容を思い出すのにも役立つ。
- ・これから先の予定やあなたが不在になる期間について、事前に話し合っておく
- ・次の面談の日時を取り決め、その時までに進めておくべきことについて合意しておく。手帳に書き込んだ予定が変わることはよくあるが、変更もし

- くは延期する場合は教員・学生のいずれかから申し出るようにする。
- ・ 研究に関するあらゆる文書をファイル化する。指導教員にとって、学生の研究内容を適当なファイルに整理しておくことは不可欠です。このファイルは、ある段階で研究指導を別の教員に引き継ぐことになった場合に非常に重要となります。



## 7. 学生が大学院生活に没頭するように促そう

「教員に認められたことで、ものすごい満足感を得られた。」

「振り返ってみれば、聡明かつ意欲に満ちた人々に囲まれて、彼らと一緒に研究できたことが何より楽しかったです。」

「大学院での研究や生活の中で、周りから孤立したり孤独に陥ったりする危険を少なくするにはどうしたらいいんだろう？」

学生は自分自身が大学コミュニティの一員であると実感できるようになれば、研究の経験は飛躍的に深まり、充実することでしょう。メルボルン大学が行った調査によれば、この点についてはまだ改善の余地が相当大きいようです。大学院修了者の3分の1以上は、自分の専攻の教員から、同僚あるいは仕事仲間としてみなされているとは思っていないようです。他方、学位論文の作成を最も肯定的に自己評価している修了者は、教員から対等に扱われていたと報告しています。

大学の中で孤立すること、および社会的に孤立することは、学生が研究活動を行う上で広く知られている問題点です。指導教員や専攻は、学生が不快な経験をしないように誠意ある対策をとることができます。ありていに言えば、各専攻が活力にあふれる学習コミュニティを目指せばよいのです。そのような学習コミュニティとは、構成員の人格とキャリアの発達に関心を持ち、個々の構成員の功績を認め、これに報いようとする集団です。このような集団に所属することによって、困難な状況に直面した場合でも、知的刺激や支援を受けることができます。学習コミュニティに属している学生は、大学に対する忠誠心や帰属意識を持つようになり、仲間の学生や教員集団と目的意識を共有するようになります。小冊子『大学院での学習の手引き』(*Induction and Welcome to Postgraduate Studies*)は、大学院新入生がコミュニティの一員になれるように、各専攻としてどのような支援が可能かについて提案しています。またこの小冊子は、学生が研究を始める際に生じる多様な二

ーズに対応するための助言を行っています。

学習コミュニティを作ること、そして学生がその一員であることを保証することは、個々の指導教員や大学院コーディネーター(Postgraduate Coordinator)の責任です。同時に、学生も大学院生活を充実させる上で率先して行動することが求められます。入学時には、学生と教員によるグループミーティングを十分に行うことが必要です。グループミーティングにはいろいろな方法があり、メルボルン大学には優れた実践事例があります。

・学生と定期的に昼食を一緒にとり、あるいは夕方にセミナーの機会を設け、学生と教員が研究の進行状況を共有することは、学問的な成長と親睦を深めることを両立させる上で理想的な方法です。指導教員だけに頼らない相互支援のネットワークを構築するという点で、研究セミナーは優れた導入方法であると言えます。セミナープログラムを活発に実施することは、学生同士の動機付けや士気を向上させる重要な要素です。こうしたプログラムによって学生はプレゼンテーションのスキルを向上させ、自分の研究の価値について自信を深めることができます。また、教員もこうしたプログラムを通して、学生の研究に関わりを持ち、興味を持つようになるでしょう。

・客員教員によるセミナーは、各専攻の大学院コミュニティを発展させる良い機会を提供してくれます。

・年頭行事、年末のお祝い、随時行う肩の凝らない午後・夕方の親睦会などは相互交流を深める機会になります。またこうした機会は、新入生をコミュニティに歓迎することにつながります。

・定期的に発行するニューズレター、メール会議やインターネットのネットワークが、大部分の時間をキャンパスの外で過ごしている学生にとっては役に立つかもしれません。

こうした活動にまず責任を負うのが大学院コーディネーターの存在です。

そして、個々の指導教員は自分の学生が大学コミュニティに加わるように促しましょう。

特にパートタイム学生や実験室を必要としない学生には、自分の属する専攻の中で時間を過ごすように奨励することが大事です。学生用の整理棚を各専攻で提供するくらいのサービスは最低限必要でしょう。スペースに余裕があれば、大学院生に研究室や専用の閲覧席を用意するのもいいでしょう。大学院生センターでも、大学院生のためのスペースを提供しています。

大学院生が学部生向けの授業を担当することは、自分の専攻における大学院生活の充実をもたらします。この方法は、大学院生が教育活動と研究活動の間の適度なバランスを保つことに注意を払うならば、自分の研究を授業に関連づける上ですばらしいやり方です。各専攻は、授業を担当している大学院生が満足と成功を得られるように、彼らが適切な支援と助言を受けられる体制を整える必要があります。指導教員は、大学院生の授業担当が彼らの研究の進捗を妨げないように、そして彼らが期限内に学位論文を書き上げられるように支援しましょう。

専攻の枠を超えた大学院生コミュニティや大学院生活について学生に紹介することも非常に重要です。メルボルン大学の大学院生協会や大学院本部ではさまざまな学術的・社会的な活動を提供しています。こうしたプログラムの効用を学生に教えてあげましょう。



## 8. 学生に知的刺激を与え、研究意欲を高めるように支援しよう

「独力で自分の研究を進めることと、ある事実を発見した最初の人間になるという経験にはゾクゾクした。」

「私の指導教員の一番良いところは、彼が元気を与えてくれる人だったことだ。」

指導教員は学生に刺激を与え、彼らの意欲を持続させる上で、重要な役割を担っています。一般的に、大学院生は入学当初から研究をしたいという強い願望を持っています。でも、その願望が途中で萎えてしまった時には、指導教員は学生を支え、応援してあげましょう。

大学院での研究を最も勇気づけるのは、その研究の重要性に対する確信です。研究者は自発的に行動し、自己管理を行うことが求められます。そして、長期間にわたって努力を続けるためには、本物の義務感と自己責任の意識が必要となります。

研究の最初の段階から、指導教員は学生がやっている研究の重要性を彼らに自覚させましょう。そして、研究が進むたびにそのことを頻繁に再確認してあげるのです。おそらく、その研究の重要性については指導教員を引き受ける前にわかっているはずですが、研究によって提供される新しい知見など、知の体系の中ではわずかな隙間を埋める程度のものかもしれません。それでも、学生はあらゆる研究者が取り組んでいる事業、すなわち人知の発展に貢献しているのです。研究に取り組むことの崇高さや知的刺激を学生に与えることは、相当に大きな価値と実用性をもたらすことなのです。

学生の研究の重要性を認めてあげるもう一つの方法は、学生のアイデアと一緒に検討したり、討論に参加することです。こうした取り組みを積極的に行うほど、学生を仲間としてみなしているという意思表示を強く示すことに

なります。もし学生が議論に加わるだけの自信を持っており、(最も大事なことですが) 提示された課題の趣旨を理解しているのなら、会議の場で同僚を白熱した議論に巻き込むように、学生にも同様の敬意を払って議論への参加を促してはいかがでしょうか。

研究の構造化、体系化、手続きの透明性、これらはすべて研究指導上、とても重要です。しかし研究に没頭し、知的探求にわくわくする気持ちがなければ、研究は不毛の作業となり、ついには自分の研究を信頼できなくなってしまいます。

長期間にわたる研究では、学生の関心や意欲が落ち込む時期もあるということを用意しておくべきでしょう。多くの大学院生は何年間にもわたって研究に取り組み、息抜きをしたりします。このように研究に集中していると、精神的疲労を感じたり、倦怠感を覚える時期もあるでしょう。自分がやっている研究の目的や重要性に疑問を感じてしまう学生もいるでしょう。たいていの場合、そのように感じるのはごく普通のことだと学生を安心させつつ、こうした問題に共感をもって理解してあげることが適切でしょう。しかし、最も効果的な対処方法はおそらく、現在進行中の研究内容に言及することであり、どうしてその研究をしたいと考えたのかを学生に思い出させることです。次のような調子で試してみませんか。「ほら、君はすごいデータを持っているじゃない。これまでやってきたことを思い出してごらん。無駄にしたら本当にもったいないよ。他の人にも教えてあげようよ。まだほとんど知られていないのだから。」あるいは、学生の個人的な目標や職業上の目標についてもう一度思い起こさせて、これらを達成することの重要性を考えさせるという方法もあるでしょう。

学生が研究に夢中で取り組むように促すもう一つの方策は、彼らがどんな研究をしているかをセミナーや会議の場で他の人と意見交換できるような機会を提供してあげることです。各専攻で活発に研究セミナーを催すことは、学生の研究意欲や士気を持続させる上で鍵となります。こうしたセミナーには教員が定期的に、積極的に、かつ協力的に参加することが求められます。



## 9. 学生に研究上および個人的な問題が発生した時は支援しよう

報告書によれば、メルボルン大学卒業生の60%は、研究上で指導教員から受けた個別支援が適切であったと考えている。一方、約15%の卒業生は適切な個別支援を受けなかったと考えている。

高等教育機関における教育と研究指導に関する膨大な研究から言えることは、研究指導の成功の鍵はとてもシンプルだということです。すなわち、教員が一人一人の指導生に対して関心を払うということです。もちろんこれだけで十分ではなく、専門分野の知識や教授法上のスキルも必要です。しかし、一人一人の学生に関心を払うことは最も重要であり、もしそうしなければ、研究指導が成功するチャンスはしぼんでしまいます。もし教員が学生の成長や幸福を心から願っているなら、学生は教員のあらゆる欠点や風変わりな部分も受け入れてくれるように思います。

学生に対して関心を払うということは、指導教員が学生の知的発達に対して責任を持つということです。教員の学生に対する関心は研究上の発見、苦闘、知的興奮、挑戦などのプロセスを通して大きくなります。学生と緊密な友情関係が生まれることもあります。特に必要ではありません。必要なのは、学生を一個の人格として受け入れることです。つまり、家族、友人、仕事、地域社会など、学生が大学以外で行っている幅広い活動にも関心や責任を持つということです。こうした活動は研究に大きな影響を及ぼし、時には最悪の結果をもたらすこともあります。

博士論文を完成できなかった理由を調べてみると、学術的な要因よりもむしろ、外部要因の方が深刻なことが明らかです。主たる外部要因としては、経済的な問題などがあります。家族の扶養責任はしばしば研究の進展を妨げます。特に女性にとっては、大学院で研究する時期がちょうど子育てを始めるタイミングと重なってしまうことが多いのです。メルボルン大学では学生の個人的問題の解決を支援するためにさまざまな方策を提供しています。そ

れらは本冊子の末尾に列記しておきました。

外国人留学生にとっては、新しい社会文化に適応しようという気持ちが大きいほど、新しい研究文化に適応しようとする気持ちも強くなります。ホームシック、孤独感、疎外感などはいずれも、とりわけ研究の最初の段階では、留学生が眼前の研究に集中するのを妨げます。

こうした状況の中で、指導教員には何ができるでしょうか。このような外部要因は指導教員の監督能力と責任を超えているように思われます。指導教員には学生の経済的な問題を解決することはほとんど不可能です（少額の貸与奨学金はさておき）。まずは、指導教員としての責任には限界があるということを認識しておくことは適切でしょう。その上で、問題解決にこだわらなければ、指導教員が支援できる方法はいろいろあります。

・個人的な問題と学問的な問題の相互関係に注意しましょう。もし学生が苦しんでいるようだったら、個人的な問題が研究に支障をきたしているのかどうかを察知するように努めましょう。ほとんどの学生はこうした問題を指導教員に知ってもらいたいと考えているようですが、その場合は、指導教員もある程度関わらざるを得なくなります。

・もし学生が学問以外の問題について指導教員のあなたに知ってほしいと思っている場合は、あなたが学生に関心を持っており、支援する用意があるということを、最初から学生にはっきりと伝えておきましょう。彼らが住宅の問題や子どもの病気、仕事上の予想外の要求などについて相談したいと考えているなら、あなたが共感をもって受け止めてくれる存在だということを学生に知らせましょう。

・学生が個人的ストレスを抱えているときには、学問的な要求についても柔軟に対応しましょう。ただし、研究上の課題から逃れるために、自分が危機に瀕していると何度も偽る学生には、毅然とした態度を示すことも必要かもしれません。しかし、これは嘘だろうと早合点してはいけません。本当に危

機に直面している学生もいるのです。

・学生の話に対しては、思いやりをもった聞き手になりましょう。カウンセラーになろうとしてはいけません。スキルを身につけていないのにカウンセリングをしようとする心身を消耗するし、危険でもあります。多くの経験豊かな教員は、友好的かつ思いやりのある態度で学生に接するだけでなく、学生と適切な距離感を保っています。だから、学生は個人的な事柄を何度もしつこく議論すると、指導教員から敬遠されるという暗黙のサインを受け取るのです。学生の研究計画にどのようにアプローチするかを決める上で、指導教員のあなたには十分な知識が必要です。その役割はたいていの場合、そして紛れもなく、学生を支援することなのです。

・本当に深刻な学生の問題には専門的な援助が必要です。メルボルン大学は多くの方策を提供しています。あなたの学生にどの方策が適切かを確認しておきましょう。必要ならば、学生がそうした窓口で連絡を取ったり、面会の約束をとりつけたりするのをサポートしましょう。

学生とどの程度親密になり、交流するのが適切かは、教員一人一人が判断することです。しかし、性的な関係を持つことは許されません。学生と性的な関係を持つことは大学教員としての倫理に反する行為です。メルボルン大学の基本方針では、性的な関係は本来避けるべき利害対立を引き起こす恐れがあると明記されています。

学生が直面する危機には、個人的な事情とはほとんど関係なく、研究自体の問題から生じているものもあります。他の章で述べたように、そうした災難を避ける最良の方法は、研究の土台を盤石なものにすることです。それでも、最もしっかりした構造の研究でも予測せざる圧力によって影響を受けることがあります。学生は自立して考えることを奨励されるので、彼らは指導教員が知らず知らずのうちに困難な状況に陥る危険性があります。

実験室の中で研究を行う学生は、実験設備や他のリソースに依存している

分、とりわけ危機に直面する可能性が高いといえるでしょう。設備に習熟し、一定の方法論を用いて主要な問題を解決するには多くの時間を必要とします。このほか、学生の研究成果を先取るような、あるいは土台を覆すような文献を発見した時、研究のかなりの部分が進んでから自分の方法論が使えないとわかった時、データや実験対象を紛失した時、加工困難な物質が大量に集積している時なども、学生は学問的な危機に陥ります。そういう場合は、計画通りに進む研究などほとんどないのだから、失敗は珍しいことではないし、必ずしも自分の力不足を意味するわけではないと学生を安心させることが大事です。

それぞれの問題は個別の文脈の中に位置づける必要があります。一般的に言えることは、最良の解決策を見つけるために、指導教員は学生と協同する責任があるということです。指導教員は学生とチームを作り、協同事業を行うのです。学生がパニック状態に陥ったときは、その研究に関わるすべての人は学生を支援することが求められます。

## 研究指導の継続性

学生が学位候補者として過ごす長い間、指導教員は休暇をとったり、あるいは新しい任務を引き受けざるを得なくなったり、他大学に異動することがあります。専攻長や大学院コーディネイターは、研究指導の継続性を保証する責任があります。一方、指導教員は学生が支援を受けられずに放置されるようなことがないように、人格的かつ職業的な責務を負っています。

指導教員と学生の関係が気まづくなったり、破綻することもあります。そういうことがいつ起こるかは予測できませんので、常に危機を回避できると考えるのは現実的ではないでしょう。学生が不幸な状態にある時、あるいは不満を持っている時、指導教員が最後まで気づかないことはよくあります。こうした場合は、学生自身がその問題に取り組むきっかけをつくるしかありません。学生が安心して問題に取り組み、考えられる解決策を提供できるような、しかるべき仕組みを各専攻で作ることが不可欠です。

指導教員とは別に、大学院生共通の相談窓口となる教員を専攻ごとに設置するという方法が有効かもしれません。学生に知らせておくべきことは、研究指導上の問題というのは往々にして起こりうるものであり、指導教員を非難したいときは必ずしも教員に直接不満を口に出す必要はないということです。つまり、専門のスタッフが個人的および内々に学生の相談に乗ること、相談を受けた後は、学生からの要求なしにはいかなる措置もとらないという原則をはっきりさせればよいのです。問題点を解決する方法は三者（教員、学生、相談窓口となる教員）によるミーティング、指導教員の交替など、いろいろあります。大学院生協会では、指導教員との関係に困っている学生に対して、指導教員に知られないようにアドバイスを提供しているということも学生に周知しましょう。

すべての指導教員は研究指導上の責任を他の教員に引き継ぐ準備をしておかなければなりません。こうした必要が突然生じる場合に備えて、それぞれの学生の進捗状況を文書ファイルとしてまとめておき、次の指導教員が利用できるようにしておく必要があります。新しい指導教員と学生の関係を上手に築くには、お互いに相当歩み寄ることが大切です。研究指導の責任を引き継ぐ教員は、以前の指導教員と学生の間で合意された内容に敬意を払い、両者の協力関係や研究計画に対して学生が抱いている期待に添うことが求められます。また最初からやり直しかという思いは、学生を打ちのめす恐れがあります。もちろん、新しい指導教員のアドバイスや指導を学生が受け入れてくれればよいのですが、その程度は研究の進捗状況や計画によるでしょう。新しい指導教員と新しい関係を築くということは、前の指導教員との議論や話し合いの過程を振り返るということです。

## データに溺れる

学生はときどき、自分が収集した情報の虜になってしまい、そこに一定の法則があるかどうか、どんな結果が得られそうかといった検討を始めることができません。一つ提案したいのは、すべてのデータからいったん離れて、

自分の頭脳だけを頼りに、考えられる主なテーマを1ページにまとめるように学生に求めることです。もし学生がデータ漬けになっているなら、広い視野で考えることの重要性を認識させましょう。学生を冷静にさせるには、まずこのことが大切です。その際は、口頭での指導が必要になるかもしれません。学生があなたの研究室に来ているなら、彼がコンピュータで打ち出した結果はひとまず無視しましょう。専門分野によっては、研究資料の中に一貫した物語性があるかどうかについて、学生に説明を求めるという方法もあります。



## 10. 学生の将来のキャリアについて考えてみよう

「今となっては後の祭りだが、就職する前に自分に与えられた選択肢に気づくためのアドバイスや情報をもっと必要だったと感じている。学生が外の世界に飛び出していくための準備をするには、大学側からの多くの支援が必要だと思う。」

「学位論文を書いているときに、学会誌に投稿するようにもっと指導教員が薦めてほしかった。今になってつくづくそう思う。」

「途中段階の研究成果を口頭でアピールする機会が、専攻内にもっと必要だと思う。」

これまで、学位は大学教員に就くための登竜門でした。より高度な学位取得をめざす人が増えるにつれて、その目的は大きく多様化しました。今日では、高度な専門職に就く可能性を高めるために、あるいは増大する知の体系から取り残されないようにするために、あるいは転職に役立てるために、多くの学生は大学院に進学します。指導教員の主たる役割は、これまで通り学生をアカデミックな世界に導き続けるだけでなく、むしろ他の職業分野への進出をめざしている学生に助言を与え、支援することなのです。

指導教員は学生のキャリア形成に多大な影響を与えています。その第一歩は、できるだけ早い段階に学生の将来像を明確にさせることです。往々にして、指導教員は学生が志望する業界の労働市場や、そこで成功するための方法について助言できる立場にあります。仮に、あなたにその分野に関する専門知識がなくても、その分野に精通し、助言を与えられる知人を学生に紹介できるでしょう。もう一つの重要な役割は、その業界の中で競争する上で、学生に自分の強みを自覚させることです。大学は職業案内所ではありませんが、卒業生が自分の習得したスキルを自覚し、雇用主に対してそれらを魅力的にアピールする術を身につけることは、学生と大学双方にとって利益になることです。大学院統括部では、この点を重視したリーダーシップ養成コー

ス(Leadership Development courses)を学生向けに提供しています。また、就職支援室(the Careers and Employer Liaison Unit)が提供するサービスを学生に紹介するのもよいでしょう。ここには大学院生の就職問題を担当する相談員がいます。あるいは、学生が本当に必要とする支援とは、彼らの依頼に応じて即時かつ慎重に身元保証人を引き受けることだけなのかもしれません。

一方、学生が大学教員をめざすのを支援するという点では、指導教員の役割はすでに確立されています。重要な点は、学生の研究業績を集める手助けをすると同時に、こうした学生の著作物を学会やセミナー、個人的なつながりを通して、アカデミックなネットワークの中で紹介してあげることです。その有名なものとして、大学教員と大学院生による大規模な全国組織があります(アメリカ合衆国で毎年開催される MLA 大会など)。ここでは公然と大学院生の就職活動が行われています。こうしたネットワークはオーストラリアではあまり整備されていませんが、個人的なつながりや指導教員の推薦が役に立つことは言うまでもありません。学生が大学教員のポストに就く可能性を高めるには、彼らがポストクのポストに応募するのをサポートし、かつ、大学院を修了した後も共同研究を継続するように学生に呼びかけることです。

自分の研究業績が役に立っていないという大学院生はいないでしょう。このことは、大学教員を志す学生は特に当てはまります。彼らは切れ目ない研究業績で埋め尽くされた履歴書(CV)を書き上げる必要があります。大学教員以外の道をめざす学生にとっても、公の場で自分の研究成果を披露する経験で身につけたスキルは、一個人としても、職業的な面においても役に立つのです。

しかるべき時期と状況を見て、指導教員は学生の論文が審査員のみならず、幅広い層の人々に読んでもらう価値があると彼らを説得し、出版の手助けをしましょう。研究成果は、学会誌論文、学会発表資料としてまとめることが一般的ですが、専門分野の定期行物、新聞、インタビュー、ウェブ、展覧会、公演といった媒体もありうることを学生に伝えましょう。博士論文の研

究から生まれたこれらの成果は、大学全体の研究成果の中で重要な部分を占めています。

## 研究成果を発表し、出版する

研究成果の普及を促進することは、メルボルン大学の博士論文において不可欠な要素であると考えられています。時には、研究が最終段階に至る前に成果を出版することが適切な、あるいは不可欠な場合があります。特に理科系の大学院生は、学位論文を提出する以前から定期的に論文を投稿することが奨励されますし、得られた知見を論文の形に一刻も早くまとめるように要求されます。他方、他分野の学生は世間一般の評価にさらす前に、まず研究内容の完成度を高めることを求められるかもしれません。

職業的性格が強い分野の博士論文では、出版することがそれほど重要視されない場合もあります。すべての大学院生が、より広範な読者に向けて出版したいと思っているわけではありません。しかし、各専攻に出版を奨励する文化が存在していれば、それが当然であるという雰囲気の中で学ぶことになり、自分もいずれは出版したいという気持ちが高まることでしょう。各専攻は、大学院における研究文化を発展させ、持続するよう努めなければなりません。なぜならその研究文化に浴しながら、大学院生はひとしく指導教員の助言と励ましを受け、出版すること、および他の方法で研究成果を普及させることに関心を持ち続けることになるからです。

## 論文の共著者になる

論文の書き方については、それぞれの専門分野に独特のしきたりがあります。たいていの場合、学生の研究を出版する際に指導教員が共著者になるという方法は、ごく適切だといえます。こうした論文の著作権をどうするかについては、関わったすべての人にとって公平な方法を取り決めておくためにも、早めに相談しておきましょう。共著が望ましいかどうかは、情報収集・分析、出版の段取り、実際の執筆において、各の取り組みや貢献度をともに

して決めるのがよいでしょう。しかし、論文の中心的なアイデアがどこから生まれたのかを特定するのは容易ではありません。これが絶対だという公式は存在しないので、よく話し合って検討するしかないでしょう。

学生が全国的あるいは国際的な学会で研究発表することは、教育的見地からも、職業的見地からも貴重な経験であり、あらゆる大学院生にとって望ましいことです。同時に、研究内容が不十分な場合や、発表に必要なスキルや自信が足りない場合には、学生は傷つくかもしれません。

- ・ 学生に対して、学会発表の計画を確定する前に、あらかじめ指導教員に相談するように学生に強く念押ししましょう。研究成果を発表する準備ができているか、そしてその学会が学生の研究発表の場として適当かどうかを徹底的に検討する必要があります。
- ・ 学生にとって適切な学会を薦めましょう。指導教員は、学会のスタイル、予想される聴衆と彼らが期待するもの、その分野において現在注目されている研究領域と内容および論争点などに関して学生に助言することができます。学生には将来のことをよく考えた上で入会するように、そして学会に入会するのに必要な資金の目処を立てるように勧めましょう。
- ・ 学生が発表題目や発表要旨を作成する際には支援してあげましょう。学生が時に必要とするのは、より大局的見地からみて、扱いやすい部分がどこかを見抜くことです。
- ・ 学生が発表原稿を作成するのを手助けし、適切なプレゼンテーション方法や必要なサポートについて助言しましょう。ほとんどの学生にとって、プレゼンツールの取捨選択や発表のタイミングなどの助言やトレーニングは役に立つことでしょう。メルボルン大学の各専攻では、「研究中の学生のためのセミナー」(research-in-progress seminar)を開催して、学生がこうしたスキルを身につけることを支援しています。学会の場が厳しい視線にさらされることに比べれば、このような機会はずっとリラックスした環境

を学生に提供するものです。

学生は初めて出版する際にも、同様の支援を必要とします。学生に適切な学会誌を紹介することは彼らの役に立つでしょう。さらに学生は、自分の論文をどこに投稿すればよいかについて助言を必要としています。多くの学生は、自分の膨大な研究内容から成果を抽出する際に、あるいは論文の中で繰り返し用いた概念の本質をとらえる際に、途方に暮れることがあります。また論文を書く際には、文体や様式をいくぶん修正した方がよいこともあります。学生が学会誌用に投稿する論文を書き上げ、査読や編集の嵐を乗り切るには、指導教員からスキルの手ほどきを受ける必要があります。その論文が学会誌に採択されることがあれば、それは二人にとっての勝利だといえるでしょう。

## 大学院生にとっての旅行の意味

大学院生が旅行することは、彼らの研究にとって重要な意味を持っています。メルボルン大学では、博士号候補者の旅費を助成する機会をいくつか用意しています。また、博士課程の学生の海外渡航を助成する機会もあります。時期と場所を慎重に選んだ旅行をすることによって、大学院での経験はますます豊かなものとなり、人脈も広がります。さらに重要なことは、こうした旅行を通して他大学におけるポストドク用ポストの状況について知ることができます。旅行は大学院生が専門的能力を磨く上でよい機会といえるでしょう。



## 11. 学生の最終的な研究成果を精査しよう

「学位論文が完成したとき、とてつもない達成感で一杯になった。論文を書き上げる全過程で学んだ経験を通して、および研究の本質を見抜くのに必要な自己鍛錬を通して、まぎれもなく自分が学問的にも人格的にも成長できたと実感できた。」

学位論文提出に向けての最終局面では、学生はたいてい半狂乱状態になります。研究は高速ギアモードに入り、総仕上げとして口頭発表が課せられます。この局面に至ると、指導教員は気持ちを切り替えるようになります。というのは、今や必要なのは審査の観点から全体を見渡すことだからです。時には非情な判断が必要になることもありますし、教員のアドバイス通りに修正できたかを確認することが大事です。

学生は論文提出のラスト数ヶ月、数週間になると、論文の内容に関して多くのフィードバックを欲しがるでしょう。書き上げた原稿の全体像に関するフィードバック、つまり全体を通してどのように議論がなされているか、論文が扱っている範囲は適切かなどについて、書面で指導することは指導教員にとってそれほど難しくはありません。箇条書きのリストで十分なことも多いでしょう。しかし、段落ごとに文章を指導する際や、バラバラになっている論点を明らかにする際などには、悪魔が細部に潜んでいるかもしれません。時には、問題点の本質を正確に把握するのが難しい場合もあります。論文の中で行っている議論の不備について学生に気づかせる一つの方法は、「どうして君はこのことを言いたいのか?」「どうして、この場でそのことを主張したいのか?」などとコメントして、論証の筋道を見直すように勧めることです。

### 編集上の倫理

「論文の提出方法に関して8つもアドバイスをもらうつもりはなかった。でも、指導教員の指示は的確だった。」

メルボルン大学の PhD ハンドブックでは、編集について「文章表現上の問題点と単純ミスについて詳細かつ広範に修正を行うこと（問題点について一般的な指針を提供する意味の反対）」であると定義しています。

指導教員は学位論文の編集作業をある程度引き受けざるをえませんが、度を過ぎてはいけません。このハンドブックでは、文章上の問題点があるときはすみやかにこれを指摘し、そして学生が編集スキルを身につけるのを支援することが強調されています。

文章を書くスキルや編集するスキルは、研究上のトレーニングで身につけるものです。そして、論文の完成度は、学生の研究成果や学生の文章を書く能力や議論する能力によって示されることは言うまでもありません。ごく珍しい例として例外的に、学外にある有料の編集サービスを利用することを大学が認めることがあります。いずれにしても、学生が各種の編集サービスを受ける場合は、必ず指導教員の承認が必要です。

学生の研究成果に関してコメントすることの利点や、その教育上の価値については、さまざまな考え方があります。指導教員によっては、学生の文章を添削指導し、修正方法まで示す人がいます。こうした指導によって当面の修正はできますが、学生が十分に学習しない可能性があります。他方、修正方法を伝えたい気持ちを抑え、問題箇所を指摘し、欄外に質問を書き込んで、問題解決を学生に任せるといった指導教員もいます。それぞれのやり方に道理があります。問題にまさに直面している学生や、論点を一つ一つ展開しようと格闘している学生にとっては、独り立ちしようとする段階で受ける編集上のアドバイスは助けになることでしょう。ただしこうした支援は、学生の成長に伴い、やがて必要なくなるでしょう。

学生が論文全体を最初に書き上げた時は、まず指導教員はこれを注意深く読んで、全体が首尾一貫しているかどうか、議論の内部に矛盾が起きていないかどうかを確認することが必要です。ぎりぎりになって文章を削除したり、資料を付け加えたりすることもよくあります。次に必要なのは、論文の細部

に集中して、全体の整理整頓を行うことです。論文を提出する前には、指導教員が提案した内容を学生が見落とししていないかをチェックしましょう。各専攻は完成した論文を提出前に複数の教員で確認することによって、学位審査を成功させる可能性を高めることができます。

指導教員は学生の論文にとって適切な審査員を選ぶ上でも責任があります。審査員を選ぶ基準は、もちろん学位の水準によって異なりますが、一般的には論文の専門分野について通じている人あるいは専門家で、学生の研究方法に敬意を払い、学生の将来にとって役に立ちそうな人を審査員として選ぶべきでしょう。あらゆる指導教員が自覚すべき重要な点は、学生の審査を通じて、教員自身、各専攻、大学もまた審査を受けるのだということです。

審査員をどう選ぶかは、研究指導の最終段階において指導教員が数多く決定しなければならないことの一つであり、学生に相談するわけにはいきません。他の選択事項は、指導教員と学生が話し合っ決めてよいでしょう。決定すべき事項の一つは、論文の提出準備ができているかどうかということです。現在の状態で論文を提出した場合、どのような研究成果が予想されるか、あるいは妥協せずに提出を延期する場合にどのくらい研究が進捗しそうかを考えてみるのもいいでしょう。

ほとんどの人にとって、学位論文を仕上げることは人生最大の業績の一つであり、過度の感情移入がストレスや疲労をもたらすこともあります。最後の段階では、学生の研究成果を疑う作業を始めてみましょう。研究の大部分が完了し、(指導教員の所見では)追加すべきことはほとんどないという段階でも、行き詰まってしまう学生がいます。指導教員はわざと学生とは反対の見解を示したり、論文全体にわたる「質保証のための予備審査」(quality-assurance audit)を行いつつも、冷静な態度を保ち、学生に安心感を与えることが大事です。

学生と指導教員の協力関係は、学位論文の提出によって終了するわけではありません。論文の審査過程や、めでたく学位授与された際のお祝い会、さ

らには論文の出版可能性や学生の就職についても一緒に検討することで、協力関係は継続されるのです。

こうした目標に向かって、学生と指導教員の協力関係を少しずつ発展させることは、研究大学で教鞭をとる上での最大の喜びであり、収穫でもあるといえましょう。

### 口頭発表前に確認・再確認すること

メルボルン大学が授与する学位の社会的威信は高く、その研究発表の質は最高水準でなければなりません。メルボルン大学では、学生が学位論文の本審査を受ける前に、「質保証のための予備審査」を行うように各指導教員に推奨しています。この予備審査には学生による口頭発表が含まれます。この口頭発表の結果が水準を満たしていなければ、本審査を受ける資格が得られません。

指導教員は口頭発表における問題点を学生に指摘し、その対処方法を支援する責任があります。口頭発表には次のような質問があります。

- ・ すべての章、節、段落に番号が統一かつ順序通りにつけられているか？
- ・ 文章のレイアウトが一貫しており、異なる様式が混じっていないか？
- ・ スペル上の間違いや特殊な表記を取り除いたか？
- ・ 論文本体のページづけは正確か？
- ・ 引用や参考文献の表記方法は統一されているか？  
(学生には早めにこれらのガイドラインを示した方がよいでしょう)
- ・ 謝辞は適切か？



## 付録：メルボルン大学の大学院生向けサービス

大学院本部と大学院生協会は、メルボルン大学の大学院生に最初に活用してもらいたい素晴らしい組織です。

### 大学院本部(The School of Graduate Studies)

大学院本部では大学院生向けにさまざまなサービスやリソースを提供しています。リーダーシップ、コンピュータスキル、コミュニケーションスキル、一般的な研究スキルなど、幅広い領域にわたって大学院生のスキル開発のためのプログラムを用意しています。また、学位取得に関するあらゆる相談にも対応します。「大学院生のための図書館研究コンサルタント」(A Postgraduate Library Research Consultant)も利用できます。

### メルボルン大学大学院生協会(The University of Melbourne Postgraduate Association)

大学院生協会では、大学院教育に関する展示、宣伝、情報提供と助言、学問的および専門的能力開発プログラムの提供、授業の実施、社会的・文化的活動、オリエンテーション、各専攻への支援、国際的プログラムおよび女性のための大学院プログラム、出版などを行っています。

### 大学院生センター(The Graduate Centre)

大学院生センターでは、コンピュータラボ、閲覧スペース、食堂など、大学院生専用の設備・リソースを提供しています。

次ページのサービス機関も大学院生に専門的なアドバイスを提供してくれます。指導教員が学生にこうしたサービスを紹介する場合は、あらかじめ問題点を絞り込み、必要なスキルを明確にしておく必要があります。これらのサービスの情報や具体的な連絡方法は、メルボルン大学のウェブサイトで簡単に見つけることができます。

<http://www.unimelb.edu.au/>

### 学習支援室(Learning Skills Unit)

学習スキル室には、大学院生のために時間管理や組織化スキルなどに関してアドバイスのできる専門アドバイザーがいます。また、大学院生用の自習ハンドブックを多数取り揃えています。

### 英語を母語としない学生のための英語学習センター

(Centre for Communication Skills and English as a Second Language)

このセンターは、英語を母語としない学生への支援を行っています。学生が英語の読み書き、聞き取り、スピーキングの能力を向上できるように、ランチタイムに無料の授業を行っています。英語に関する内容や英語による学位論文、口頭発表についての無料の個別指導を行っています。

### 大学院生のための図書館プログラム (The Library Program for Postgraduates)

図書館では大学院生のための多くのサービスを行っていますが、その中でも研究に関連する相談や情報提供は役に立つでしょう。

### 統計相談センター (The Statistical Consulting Centre)

統計相談センターでは、大学院生を対象とした統計相談と統計トレーニングの機会を提供しています。このサービスは一定程度まで無料です。

### 情報技術サービス (Information technology Services: ITS)

ITS ではコンピュータシステムに関する入門コースから、ソフトウェア活用の上級コースまで、幅広い講習会を提供しています。大学院生には無料の講習会もあります。他の講習会も低料金で提供しています。

### カウンセリングサービス (Counseling Service)

学生相談は学生および教職員の個人的問題、大学に関する問題、人間関係上の問題、家族問題、抑うつ、不安などの各種相談に対応します。ただし、助言以上のサービスは受けられません。

### 医療サービス (Health Service)

大学の医療サービスは学生や教職員に必要な診療科をカバーし、ベテランの医療スタッフが対応しています。健康保険(bulk-billing)が適用されるので診療代はかかりません。

### 体の不自由な学生へのサービス(Disability Liaison Unit)

メルボルン大学では、体の不自由な学生あるいは長期にわたって病気を抱えている人への情報提供や支援を行っています。代書、代読、個別の障害に対応可能な様式で作られた学習資料の提供、図書館を利用する際のサポート、特別な設備、キャンパスでの付添など、障害によって必要となる大学内での支援を行います。

### チャプラン(Chaplaincy 訳注：大学付きの牧師)

メルボルン大学のチャプランは、留学生を含む、あらゆるキリスト教宗派のための相談、支援を行っています。

### 学生支援サービス(Student Support Services)

メルボルン大学では学生の住居、雇用、経済的な問題に関する支援を行っています。住居の案内と賃借、アルバイトや臨時雇用、学生ローンや奨学金に関するアドバイスや情報を提供しています。

### 就職支援室(Careers and Employer Liaison Unit)

就職支援室では、学生の将来設計や就職スキルを高めるためのプログラムを提供しています。同支援室ではインターンシップの斡旋を行ったり、事業主と協同して大学院生向けのさまざまな雇用プログラムを提供しています。

### 託児サービス (Children's Services)

学生や教職員のために大学内およびコミュニティセンターで託児サービスを提供しています。

## 訳者あとがき

本書は、1999年にオーストラリアのメルボルン大学で作成された *Eleven Practices of Effective Postgraduate Supervisors* の日本語訳である。原書を翻訳したいと考えた理由はいたってシンプルである。近年の日本では大学院生数が飛躍的に増加しているにもかかわらず、研究指導に関するガイドがほとんど存在しないことを日頃から不思議に思っていたからである。本書は狭義には大学院生を多く擁する研究大学の教員を主たる対象としているが、学士課程の卒業論文においてもアカデミック・ライティングの本質はそれほど変わらないのであるから、広義には大学で教鞭をとっている人すべてを読者として想定していると言って差し支えないだろう。

たしかに、「大学の授業をどう改善するか」や「大学生がどう学ぶか」に関する書籍は、FD活動の活発化に伴い、この10年間で枚挙に暇がないほど出版されている。論文の書き方についても多くの参考書が市販されている。しかし、研究指導の要諦についてはほとんど知られていないし、教員間でも共有されていない。日本の大学教員は自分がかつて指導教員から受けた研究指導を思い出しながら、見よう見まねで学生の論文指導を行っているのが実状である。今日では、多くの大規模大学において教育・学習活動支援を目的とする高等教育関連センターが設置されているが、活動の対象はもっぱら学士課程に限定されている。率直に言って、日本では大学院教育に関する実践研究・支援はほとんど行われてこなかったのである。

本書の第一の意義は、研究指導において「最低限行わなければならないこと」、および、「してはならないこと」を明示したことであろう。これまで日本の大学教員は研究指導において最低限すべきこと (minimum requirements) が何かさえも、ほとんど共有されていなかった。第二の意義は、研究指導においてはいかなる組織的対応よりも、指導教員と学生間の信頼関係に勝るものはないということを明示したことにある。研究指導は、きわめて地道な、人間くさい、泥臭いプロセスであり、魔法は存在しない。

やや誇張があるかもしれないが、本書の基本メッセージは「汝の学生を愛せよ」であり、これは高等教育に限らず、あらゆる教育活動に共通する考え方であろう。しかし、メッセージが単純明快な分だけ、学問分野を超えた知見を大学教員間で共有できるようにスキル化することは容易ではなく、日本の大学ではこれまでほとんど試みられることはなかった。第三の意義は、大学院での研究・学習・生活をスムーズならしめるには、個々の指導教員に全面的に依存するのではなく、大学としての組織的なサポートが不可欠だということを明示した点にある。日本の大学には、学生に対するサポートを何から何まで指導教員に一任する悪しき伝統がある。これでは指導教員の首は早晚回らなくなるし、忙しい指導教員をなかなかつかまえない学生も不幸であろう。やや逆説的であるが、個々の教員が研究指導に集中できるように、大学院生に対する組織的サポートの充実に日本の大学は早急に取り組むべきであり、本書はこの点でさまざまな示唆を与えてくれる。

実のところ、日本の大学院政策は 2005 年あたりから量的な拡大から質の充実へとシフトしつつある。文部科学省の主導によって大学院教育に関するさまざまな組織的なプログラムが実施されている。そうした趨勢においても、論文作成の中核ともいえる研究指導はほとんどブラックボックス状態に置かれたままである（一部の大学では複数教員による研究指導体制が始まっているが）。近年、修士論文や博士論文の質が低下していることは多くの大学教員が実感するところである。一方、研究大学におけるアカデミックハラスメントの大部分が大学院生から寄せられていることは、学生相談の専門家の間ではよく知られている。こうしたことからわかるように、研究指導こそは大学院教育の根幹であり、学位取得の命運を握っている。しかし、それが最も「触れざるべき」存在であることもまた周知の事実である。研究指導の問題に正面から向き合うことなくして、大学院教育の真の改善はあり得ないだろう。

ただし、翻訳の過程で感じたことだが、本書には日本の大学の文脈にそのまま適用しづらい部分もあると思われる。たとえば自分の指導生をできる限り支援しようというメッセージは、実際に研究室に多くの大学院生を擁し、博士論文から修士論文さらには卒業論文まで抱えて、彼らを同時に指導しな

なければならない日本の大学教員にとって、酷な注文かもしれない。大学院重点化によって大学院生の質と量が著しく変化している今日においては、大学教員はタイムマネジメントの能力・スキルを身につけなければ、十分な研究指導をすることは困難である。ようするに、地道で泥臭いプロセスを大事にしながらも、限られた時間内にどうやったら効率的に研究指導を行うことができるかという視点が必要なのだが、本書はこの点がいささか弱いかもしれない。また、卒業論文、修士論文、博士論文という3つの異なる水準の論文において、その要求水準がどのように異なるのかという点に関する説明も不十分のように思われる。

このように本書にはいくつかの課題が残されているが、本書を刊行にあたって訳者は三つの点で満足している。一つは、この翻訳を通してリチャード・ジェームス氏をリーダーとするメルボルン大学高等教育研究センターとの長年にわたる交誼にわずかばかりではあるが報いることができたことである。同センターは研究大学における教育・学習活動を支援するための具体的な教材やプログラムづくりに少数精鋭で取り組んできたという点で、訳者の所属する名古屋大学高等教育研究センターが目標としてきた組織の一つである。

第二は、これまで日本でほとんど顧みられることのなかった研究指導の問題について議論を始めるきっかけを提供できたことである。訳者はもともと比較教育学という研究領域の出身であるが、比較教育学の基本命題は、「ある国の教育システムや教育方法を別の国が取り入れる場合、その固有の状況に合わせて適用する際に、どのような創意工夫や取捨選択が必要か」あるいは、「他国の方法を取り入れることによって、自国にどんな新しい化学反応がおこるか」というものである。本書を翻訳する機会を得たことが、こうしたミッションを訳者に思い出せてくれた。本書は、オーストラリアのある研究大学を意識して作成されているが、かなりの部分は日本の大学院教育にも当てはまるのではないと思われる。

第三は、きわめて個人的な理由である。自分自身がこれまで受けてきた研究指導に対する感謝の気持ちを本書の翻訳という形に表すことができたこと

である。個人的な話で恐縮だが、訳者は卒業論文から修士論文、博士論文に至るまで、足かけ 15 年間にわたって同一の恩師から指導を受けてきた。自由放任が大勢を占める日本の大学院ではきわめて珍しく、一貫して懇切丁寧なる研究指導を受けてきた。その有名な研究指導は、常にグローバルな研究視野を保ちつつ、「微に入り細をうがつ」という玄妙なものである。こうした名人芸はアートの要素も大きく、スキル化することは容易ではない。しかし、今でも記憶に残っているのは、個々の専門的な指摘よりも、「これはおもしろい」「やればできるじゃないか」という励ましの言葉の数々である。本書を訳出する過程で、「たしかにそうだ」「私もそうやって指導してもらった」と思わず頷いたことが何度もあった。指導教員の言葉がどれほど大学院生にとって大きな励みとなるかは、訳者自身が実感として理解できる。だからこそ、本書を初めて読んだときに「我が意を得たり」という気持ちになり、微力ながら翻訳を思い立った次第である。

翻訳作業にあたっては、名古屋大学高等教育研究センターの同僚から多くのアドバイスやコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。

年の瀬の研究室にて

2007 年 12 月 25 日

近田 政博

## 著者略歴

### リチャード・ジェームス (Richard James)

メルボルン大学教育学部高等教育学講座主任教授。同大学高等教育研究センター長を兼任。これまで大学院本部の副部長などを歴任。メルボルン大学で理学士、教育学博士を取得（教育行政学）。現在の研究関心は高等教育政策、高等教育進学における機会と公平性、質保証、学習支援、成果指標の設定、大学評価など。最近の研究には大学生の経済状況に関する全豪大学調査、低い社会・経済階層出身者の高等教育進学に関する全豪調査などがある。2006年にメルボルン大学の学士課程カリキュラムを改訂した際は全学カリキュラム検討委員会に参加した。現在は全学教育協議会に設置されている教育・学習発達委員会の委員長を務めている。

### ガブリエル・ポールドウィン (Gabrielle Baldwin)

メルボルン大学高等教育研究センターの高等教育コンサルタント兼主席研究員。英語学の博士号を取得し、オーストラリアの諸大学でさまざまな役職を歴任する。研究関心は、高等教育進学における公平性の確保、大学の研究活動が学士課程教育に与える影響、大学教育の質に影響を与える要因分析など。これまでオーストラリア高等教育に関する政策調査を数多く手がけてきた。メルボルン大学が2002年に制作した『教育・学習を導く9つの指針』(*Nine Principles Guiding Teaching and Learning in the University of Melbourne*)の共著者でもある。著書の *The Teaching-Research Nexus* は、研究志向型の授業を目指している大学教員の間で広く知られている。

## 訳者略歴

近田 政博（ちかだ まさひろ）

名古屋大学高等教育研究センター准教授。同大学の教育発達科学研究科高等教育学講座を兼担。博士（教育学）。専門は高等教育学、比較教育学。著書に『成長するティップス先生－授業デザインの秘訣集』（玉川大学出版部、2001年、共著）。『近代ベトナム高等教育の政策史』（多賀出版、2005年）。名古屋大学高等教育研究センター編『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』（ダイテック、2006年、共著）など。



# 研究指導を成功させる方法

— 学位論文の作成をどう支援するか —

---

著者 リチャード・ジェームス、ガブリエル・ボールドウィン

訳者 近田 政博

2008年1月31日発行

イラスト：スコーレ株式会社

印刷：株式会社ダイテック デジタル印刷事業部

TEL: 052-932-5768 FAX: 052-32-9666

odp@daitec.co.jp

---

© CHIKADA, Masahiro

2008. Printed in Japan

ISBN978-4-86293-012-5